

これも除夜の晩の事だ。一九は何處からか据風呂を購めて、それを擔がせて戻つて来た。彼れの事だから、何をする事やらと、家人は別に氣にも留めなかつた。

扱て元旦になると、珍らしくも早起して自らそれに水を汲み込んで、湯を沸かしはじめた。さうして夫れが恰度よく沸いた頃になると、もう早廻りの年賀の客がやつて来た。一九はこれを迎へて、年詞を述べて、それ屠蘇だ、それ難煮だと矢繼早に勸めて、賀客を煙に巻いて了つた。

「如何ですな、風呂は……。」「結構ですか、今日は元朝の事ですから、何處にも沸いては居りません。」

一九は自慢らしい顔をした。

「處が、ちやんともう沸いてるから偉いでせう。」「へえ、何處に……。」「何處と

いつて、洗湯ではありません。第一去年の垢を二日まで持ち越すといふなあ、通のする事ぢやありませんな。そこで、元朝の初湯といふものの氣持を一つ味つていただきたいもんでけして。」「へえ、なるほど、遣がは先生ですね。それぢや遠慮なく頂きませう。いやどうも、此の年になるが、お恥かしい事でございますが、まだ元朝にお湯に入つたことはいませんので。」

一九は客を湯に入れて置いて、素早く客の着物を着て、家主を初め、町内近所の廻禮に出かけた。一九は大きい男であつた。其の大きい一九が、小柄な男の禮服を着たのだから、手足がニユツと出て居る。皆な振りかへつて噴笑したが、當人の一九は一向平氣なもので、サツサ勤めだけは濟して歸つて来た。

此方はお湯から上つて、衣服を着ようと思ふと、脱いで置いた筈の衣服がないの

で、仕方がないからまた風呂に入つた。もう一九に一杯してやられたとは勘付いたので、其の歸りを風呂の中で待つたが、なか／＼歸らない。初めは氣持がよかつたが、長湯をしたものだから、上氣してグラ／＼倒れさうだ。だからと云つて上つて居れば寒い。上つたり入つたり、入つたり上つたりしてゐるうちに、一九は酒々とした顔をして歸つて来て、客の著物を其處に脱いで、

「如何でげした。風呂は、好い氣持でけせう。」

何が好い氣持なことがあるものかと思つたが、是れが普通のものならば兎も角も、一九としては有り勝ちなことだから、客も怒ることも出来ず、そそくさと着物を着て、上氣してフラ／＼する頭をかかへて歸つた。

##### 五 放蕩者が放蕩者を預かる

或る日のことであつた。浪花町の一九の家を訪れたのは、浪花町の町名主八郎兵衛。

「實は先生、今日は少々御願ひがあつて参りましたが。」と言ふ。

一九はまた何か書いて呉れといふのだらう位に思つてゐると、

「外ではございませませんが、手前の兄が大阪にございまして、呉服渡世を致して居りますが、其處の息子に利七といふのがございます。今度散々放蕩をして、家にも居られない處から、江戸にすらかつて來ましたから意見をして置いて見るに、どうしても放蕩が止みさうもございませぬので、一つ先生の許に置いていただいて、堅氣の人間にして頂くことは出来ませぬまいか。」と言ふ相談。

一九も驚いた。一九の様な放蕩ものの處へ、放蕩者を預けて一人前の人間にして

呉れといふのだから、呆れるのも尤もだ。

「なるほど、放蕩者なら話せる。預りませう。」

預ける八郎右衛門も八郎右衛門なら、預かる一九も一九だと人々は笑つた。八郎右衛門は、其の時一九の計に三百兩の金をほんの當座の御禮と言つて置いて行つた。

一九が利七といふ男を預つて見ると、なるほど一見したばかりで、色のなまつ白い、女にちやほやされ相な男で、何處までも放蕩者の型に出来て居つた。一九は利七を預ると、何と思つたか三百兩の金を懐中に、早速吉原に出かけて、其の頃名うての幫間の林中といふ男を訪ねた。林中とは兼ねて懇意であつた。

「おや、先生でございますか。」林中、今日は一つ頼みたいことがあつて来た。ど

うだい、乗つて呉んないか。「何です、御頼みとおつしやるなア。」「他でもない。如々でおれは放蕩者を一人預かつたが、此奴を一番堅藏に仕上げて貰ひたいんだ。」御冗談おつしやつちや不可ませぬ。わつちどもへ、堅藏を放蕩者にしろと云ふのなら、眼の前でして見せますが、放蕩者を堅藏にするてなア、此奴アちよつと出来ねえ御相談で……。「オイ、林中、吉原名うてのお前にも似合はんぢやないか、林中、耳を貸しな。」

一九は林中の耳に口を寄せて何か囁いた。

「なるほど、道が浪花町の先生だ。畏まりました。」「どうだい。ぢやア三百兩渡して置くよ。」と、大枚三百兩の金を林中に渡して歸つた。

林中は吉原揚屋町にちよつとした家を借り受けて一九に通知した。一九は直ぐに

利七を連れて其處に住まはせる事にした。

「遺がは一九先生だ。おれを吉原に家をもたせるなんて……………」。「利七は大悦びだ。

玉屋に行く、扇屋に行く、さては仲の町で藝妓を揚げて騒ぐといふ風に、廓の酒にのみ入り浸つてゐた。二月も経つうちに、遊女や藝妓の内幕が分つて来た。一寒からぬほどに見て置峰の雪で、偶にはあらが見えなくて面白いが、のべつ幕なしとあると、裏面の汚いことや何かが鼻につく。利七もそろ／＼厭きが来て、堅氣の人の中に交つて見たいと、揚屋町の家を出て、大門まで来ると大門際の井筒屋と云ふ揚屋の二階に陣取つてゐた一九が、

「利七さん、何處に行きなさる。」「吉原では退屈したから、江戸の方へ遊びに行か

うと思ひまして……………」。「それは不可ない、八郎右衛門さんから頼まれてゐる。吉原で厭になるほど遊ばして呉れといふ事だから、大門から一步だつて外に出ることは出来ません。お歸んなさい。」

追ひ返された利七。これではお慈悲の牢獄に入れられてゐるやうなものだと私語する。出るなと云はれると、尙ほ出て見たくなる。夜のドサクサに紛れて出ようとする、大門口の會所に詰めて居る定使が、

「不可ません。若旦那、浪花町の先生からお許しのないうちは、一步だつて大門から出すことは出来ません、お歸んなさい。」とまた追ひかへされた。

然うなると、益々廓の酒が旨くなくなつた。遊女や藝妓の面を見るのさへ厭はしくなつた。初めは吉原に家を持たして呉れると喜んだ利七が、近頃では堅氣の里が

戀しさに、鬱ぎ込んでばかり居る様になつた。粹だと感謝した一九が、此の頃では恨めしくなつた。

「先生、もう助けて下さい。私も大阪で散々遊んで、家にも居られず江戸に來ましたが、どうも遊女や藝妓は面白いものだと思つて、矢つ張り放蕩が止みませんでした。揚屋の酒ほど旨いものは無いと思つてゐたのは誤りでした。此の廓に來らざるこそ通ぞかし」と高尾が言つたといふことですが、まつたく堅氣ほど粹なものはないといふ事が思ひ當りました。先生、お頼みですから大門から外に出して下さい。」

と、利七はある日一九に向いて、泣かんばかりの顔をして頼んだ。  
「利七さん、本來ならなく、まだ大門から出されない。といふのは、まだ叔父さんから預つた金が残つてゐる。だが、それほど堅氣になりたいといふのなら、出し

て上げませう。」と、林中と顔を見合せた。

### 六 天麩羅の元祖

利七を浪花町の家に連れて歸つた一九は、其の事を八郎右衛門に知らせる。八郎右衛門も喜んで、大阪の親許に知らせると、親たちも喜んで、堅氣になつて其方で商賣でもしようといふなら、資本はいくらでもやらうといふこと、だが利七これまで親たちに心配をかけたのだから、何とかして親たちの厄介にならないで、出世をしたいといふ考へ、それで使ひ残りの金が二分二朱あるので、これで何か商賣をして見たいが——と、一九に相談をした。

二分二朱で初める商賣、それにはちよつと一九も困つた。何がよからう、彼がよからうしと相談をしてゐた。

「先生、私もいろいろ考へて見ましたが、一つこちらで無いものを賣り出したらと思ひますが……。」「それは可いに違ひないが、こちらでないものといふと。」「先生は御承知でございませうが、大阪には附け揚げといふものがございます。小麦の粉を流して、魚肉に衣をかけ、胡麻の油で揚げるのでございますが、此方では精進揚げと云つて、蓮だの午芣だのの野菜ものばかり揚げて賣つて居ります。仍で、魚肉をあけて賣つたら如何かと思ひますが。」聞いてゐた一九は膝を叩いた。

「なるほど、面白い。口の贅澤な江兒ッ兒には持つて來いだ。ぢや早速それをやつて見るがよからう。」「それにしても、やつぱり附け揚げとして賣つた方が宜しいでございませうか、それとも、何とか新しい變つた名をつけませうか。」「附け揚げは不可ん。處かはれば名が變る。何とか名を變へなきや面白くないな。」「何と致し

ませう。一つ先生考へて見て下さい。」

一九はしばらく考へてゐたが、やがて筆を執つて、半紙に「天麩羅」といふ三字を認めて、

「どうだい利七さん。かうしては……。」「へえ、てんふらでございませうか。」「てんふらと讀んでは不可い。それはてんぶらと讀むのだ。」「なるほど、妙な名でございませうが、一體どういふ譯でございませうね。」「これは和蘭陀語だ。」「して見ますと、日本の言葉で言ひますと、どんな譯でございませう。」「それはお前が聴くことはい。お前はこれを賣り出して、金さへ儲かれば宜いだらう。」「それはさうでございませうが」と、それから看板も一九が書いてやるといふので、利七は急に屋臺を借りて來るやら、鍋を買ふやら、どうなり仕度も出來た。一九は飄逸な文字で「天麩羅」

と看板を書いた。そして浪花町の大道で賣り出したが、奇を好むのは世の人の常、ましてそれが江戸ッ兒の口に合つたので非常な繁昌、一月も経たないうちに、屋臺一つでは間に合はなくなつて、大阪から新たに人を雇ひ入れて屋臺を殖やすといふ始末、其のうちに其處でも此處でも眞似をするものが出来て、江戸名物の一つとなつた。而しどう云ふ意味で天麩羅といふ名をつけたかは分らない。恐らく一九の出鱈目であつたらう。

### 七 舞ひ出した羽織の紋

一九は町奉行小田切土佐守の邸に出入して、土佐守に殊の外愛されて居つた。土佐守は或る時、何かの話し序でに、雪州松江の城主、不昧公即ち松平出羽守に一九の事を話した。不昧公は急に一九に會つて見たく思つたので、小田切土佐守を通じ

て、邸に参る様にと云ふ事であつた。一九は喜ぶと同時にまた困つた。折しも夏の事であつたが、着て行く着物が無い。家主の家に行つて、やつと泣きついて借り出したのは、無紋の絹の紋付と袴。けれども不昧公の前に出るのに、無紋では無禮ぢや——と、一九も妙に行儀張つた。

やがて何か考へついたか、紙で丸に十の字を切り抜いて、それを羽織の五つ所にベタベタと貼りつけた。

「さあ出来た。遣がにおれは偉いな。丸に十の字は、大抵、日向、薩摩三ヶ國の大守、従三位中將、おれが斯うした處は、御分家とも見えるだらう。」

一九は意氣揚々と出かけた。處が家を出る時に、片袖を門口の柱に擦りつけた。糊はまだ乾いてゐなかつたので、五六寸も下の方に滑つたが、當人の一九は更らに

氣附かない。

赤阪見附の上邸に来て、案内に導かれて書院に通つた。不昧公は正面に、一の字崩しの廣袖の浴衣に、八反の三尺といふ、極めて碎けた扮装、澁團扇でフワリくと風を送つて居た。一九が、

「はッ……。」と平身低頭に及ぶと、

「其方が、十返舎一九と申す戯作者か。」御意にございます。仰せに随ひまして罷り出でました。」

挨拶をした一九は、何となく羽織の紋が氣になるので、そつと右の袖を見ると、大丈夫だと思つてゐた紋が無い。はて何れへ逐轉したのかとよく見ると、何時の間にか五六寸も下の方に滑り下つてゐた。知れなければよいがと思ふと、遺がの一九

も冷汗が腋の下からダクダク流れた。

「これよ。一九が暑氣に苦しんでゐるやうぢや。風を遣はせ。」はッ……。」

一人の近侍は、大きな澁團扇を持つて、一九の横に坐つてフワリ／＼煽つて呉れる。一九はフワリ／＼来る團扇の風は有り難いが、風が来る度に、滑つたのだから、糊がよくついてゐなかつたか、右の袖の紋が動き出した。一九は冷々思つてゐると、其のうちに紋は袖から離れてヒラ／＼舞ひ出した。

「あッ……。」と思つて掴まふとしたが遅かつた。紙の紋は不昧公の前にヒラ／＼舞つて行つて落ちた。

近侍のものどもは、噴笑たいがさうもならず、じつと可笑しさを嚙み殺してゐた。すると今度は座胸の紋が二つともヒラ／＼舞ひ出す。背のが舞ひ出したので、遺が



の不昧公も「ぶつ……」と噴笑した。

一九の方では眞面目で貼り紋をして来たのだが、不昧公の方では殊更に座興の爲めに斯ういふことをして来たのだと思つたらしい。一九は眞紅な顔をしてゐると、  
 「土佐守から、其方の事は承はつて居つた。以來邸に出入り致せ。」はッ、有り難き仕合せに存じます。」ちやが、當家に入出入り致すには、何ぞ變つた趣向が必要ぢや。ちよつとの座興にも、それだけの工風を致す其の方の事であるから、明日は何ぞ予が是れ迄見た事もまた聞いた事もないものを見せよ。」はッ、畏まりました。」と一九はほつと一息吐いて暇を告げた。

「やれ、人間萬事塞翁が馬だ。」と、邸を出て私語ながら立ち歸つた。

#### 八 見た事も聞いた事も無いもの

翌日、一九は再び出羽守の邸に伺候した。

「一九か、待つて居つたぞ。今日は約東の趣向を致して参つたであらうの。」はッ今日は殿様がこれまで御覽になつたことも、またお聴き遊ばした事もないものを御目にかけるでございませう。」うむ、早う致せ。」先づ殿様、これを御覽下さい。」  
 「何ちやこれは。」只今私が御門前に差しかかりますと、六十有餘の老人が、御門前をウロウロ致して居りますので、何うしたのかと問ひ糺して見ますると、其の老人が申しますには、私は雲州の御領内の百姓でございしますが、お願ひの筋があつて態々江戸表に参りましたが、とても私のやうな百姓ではお殿様にお目通りは出来ななし、それかと云つてお取次を願ふといふ事も出来ませんので、どうしたものかと、實はマゴク致して居る所でございませう。と、かう申しますから、それに就て

は、何かお願ひの筋を認められたものでも持つて居るか尋ねますと、持つて居ると申しますから、それではそれを出しなさい、自分が恐れながらお殿様のお手許まで差し上げて遣らうと申して、其の百姓から預かつて参つたのがこれでございます。どうか御披入を願ひます。」

出羽守は、若しや國許の家來どもが、私慾の爲めに領民共を苦しめ、苦痛に堪へかねて百姓が訴へ出たのではあるまいかと、心の裡には多少不安を感じながら、一丸が差し出した願書用のものをとつて披いて見た。其の文句には、

乍恐以書物申上候先年御用立申置候金子千兩至急入用に付何卒御返却被成下度此段申上候以上。

七月六日

百姓 田兵衛

松平出羽守様

とあつた。

出羽守幾度となく繰り返して讀んだが、どうあつても腑に落ちぬ體。

「はてナ、思ひもよらぬ事ぢや。予は百姓田兵衛なるものには未だ一面識もないのみか、千兩の金子を借り受けたる覺えがない。家來共が左様な事を計らつた事も聞いた事がない。それは何かの間違ひであらう。」

「それでは、お殿様は少しも御存じの無い事でございますか。」「うむ。百姓田兵衛なるものの名前を聞くのも初めてで、また斯様な催促の書面を見るのも初めてぢや。」「恐れながら、それが昨日お殿様とお約束致しましたものでございます。」「うむ……は……これは一杯してやられた。いや、なか／＼奇才に長けた奴ぢや。」

と、出羽守も膝を叩いて感心した。

「見れば其方は羽織がない様子ぢや、取らせるであらう。」と、定紋の羽織を下されたので、一九は大喜びで邸を退つた。

### 九 死骸から火柱

一九は常住坐臥 殆んど奇行を以て満たされて居つた。天保二年の六月の頃から、病を得て筆を執る事が出来なかつた。越えて八月の七日、早朝に家人や門人を枕許に呼んで、

「いや、皆なよく来て呉れた。おれもいよいよ今日は佛になるが、おれが死んでも決して湯灌には及ばない。着物も此の儘にして置いて、棺に入れたら、綺麗薩張りと焼いて呉れ、そしてみんな俺が焼けるのを見届けて歸つて呉れ。」と遺言した。

「承知致しました。而しあの時は遺言までしたが大ごとといふ様に、笑ひの種となるやうな健康なお身体になるかも知れません。」と門人の誰れ彼れは言つて勵ました。

「いや、兼好法師の徒然草に、人はこれ永くとも四十にして死ぬるこそやすかるべけれ、とあるが、人間は四十が死に時だ。それに俺はもう六十八、大變生き過ぎた。早く此の世をおさらばと出かけないと、あとが問へて困る。オヤ、大分脈か變になつて来たぞ。ちよつと筆を貸して呉れ。」

門人の一人は筆硯をそれへ持つて来た。一九は筆をとり上げて、机の上の白紙に、此の世をばどりやお暇に線香の

煙とともにはい左様なら

と辭世を認めた。

さうして、間もなく一代の奇人十返舎一九は、黄泉の人となつて了つた。  
 家人や門人は、一九の遺言通りに、著のみ著のまま棺に納め、翌日淺草土富店（俗に抜寺）の善龍寺地中東陽院に送葬して、引道が濟むと、直ぐに千住の焼場に送つた。

當時の焼場は、地を深く掘つてそれに鐵灸を渡し、隠亡が棺を受取ると、此の鐵灸にかけて繩を切つて、する／＼死骸を引き出し、それに火をかけて焼くといふ方法であつた。

焼けるのを見届けて呉れと云ふ遺言だつたので、三十名ばかりのものが見てゐると、そのうちに隠亡が火をかけると、一九の身體からは、シユツと音を立てて火の粉が噴き出したので、おや／＼と驚く間もなく、凄まじい爆音と共に、幾條もの火

柱が八方へ迸り出たので、何事が起つたのかと、立會つた門人一同は勿論、人間の死骸を焼くのを、塵芥溜めの鼠の死骸を焼くほどにと思つてゐない隠亡までが一驚を喫した。

やがて一九の死骸がすつかり焼けて了つたので、一同がよく／＼調べて見ると、一九は懷中に煙火の管を幾つも入れて居つたのだつた。それと分つて、一同は思はず哄笑した。

死んだ後まで人を馬鹿にして、而かも火葬場で笑はしたのは、一九を措いて他には無からう。一九の死骸は煙火と共に、吹けば飛ぶ灰となつて了つたが、其の著はした「膝栗毛」今日とても之れを讀まぬものは無く、膝栗毛に於ける、彌次喜多の奇行は、即ち一九其の人の奇行であつたのだ。

法號は「心月院一九日光信士」、遺骨は前に述べた東陽院に葬つた。

酒井抱一

一 抱一の放蕩三昧

抱一は播州姫路の城主、酒井雅樂頭忠泰の孫で、備前守忠仰の二男として、寶曆十一年七月一日、神田小川町の別邸に生れた。諱を忠因、幼名を前次、後榮八と改めた。抱一は七歳の時父を喪つたが、其の時はまだ祖父の忠泰が當主であつた。十二の歳に祖父にも別れ、家督は十八歳になる兄の忠以が相續した。馬術、弓術、劍術、槍術は勿論、手習ひ句讀其の他、大名の若殿としての教育は幼少の頃から受けた。抱一が十三歳の年、國詰めの兄に従つて本國姫路に行つた頃までは、唯だ懶發な若様といふに過ぎなかつた。それは寛永二年であつたが、越え

て九年、神出橋内の上屋敷へ移つた頃から、文藝遊藝の、所謂其の頃情弱な道と言はれた方面へ耽り出した。神田橋内の上屋敷といふのは、御本丸の大手前、即ち今の内務省のある處である。其處には下馬の制札があつたので、當年の雅樂頭が大老職として、飛ぶ鳥をも落とすほどの勢ひのあつた時分には、下馬將軍の名さへあつた。伊達騒動で有名な、原田甲斐と伊達安藝の對決、原田甲斐が双傷に及んだのも、みな此の屋敷であつた。

窮屈な、行儀張つたことの嫌ひな抱一は、奥向きから出て、此の屋敷うちの新築の長屋に移つた。天才的器用は現はれて、狂歌もやれば誹諧もやる。金春流の鼓も打つた。殊に揚弓では江戸随一とまで評判された程であつた。祖父が大老職であつた其の權威で集つた珍器佳什は藏に満ちてゐたので、自然とそれ等に趣味を覺えて、

書畫骨董や、刀劍類の鑑定にも長じてゐた。

兄の忠以も亦風雅の嗜みが深かつた。號を宗雅と呼び、茶道に長じ、繪は狩野風を學んだが、たしかに所謂大名藝の域を脱してゐた。若し長壽してゐたら、或ひは抱一以上に現はれたかも知れぬとまで言はれてゐる。其の他狂歌にも趣味を有つてゐて、太田南畝(蜀山人)が殊の外氣に入つてゐた。

中秋の月毛の駒の名にし負はば

此の天下馬の前にとどまれ

といふ歌が蜀山人にあるが、これは此の雅樂頭の觀月の宴に列つた時の餘興であつただのだ。

抱一は此の多趣味の兄に繪の手解きをして貰つた。抱一が狂歌をやつたといふの

も、兄の雅樂頭に其の趣味があつて、常に屋敷に蜀山人などが出入りしてゐたので、それ等の感化を受けたるは言ふ迄もない。抱一は狂名を「尻焼猿人」と呼んだ。俳諧は江戸座の宗匠として當時有名な馬場存茂に師事し、初め「濤花」を號してゐたが、其の後「社陵」又は「屠籠」と改稱した。

抱一は其の後、即ち寛政二年四月、彌敷町の中屋敷へ移つたが、同年七月十七日、兄忠以は三十六歳の盛りで逝去した。そして其の子の忠道が家督を嗣いだ頃から、忍びの遊興などを爲はじめて、廓などへも繁々と出入した。果ては江の島鎌倉あたりまで、泊りがけで押し出すといふ始末。さうなつて見れば、中屋敷に住んでゐるといふ事さへも氣詰りでならなかつた。

そこで同五年の十月、本所番場に旗本屋敷の賣り物があつたので、其れを買ひ潰

して隠宅にした。表向きは中屋敷住居といふことにして置いて、逗留といふ名の下にかくれては、此の隠宅に住んで、好きな俳諧、晝三昧に日を送つたり、遊里に入るのであつた。晝は狩野派の外に、歌川豊春の風を學んで、浮世繪も描けは、また宋紫石について沈南蘋風の唐畫をもなか／＼よくした。と云つたところで、天才的器用にまかせて、只だ矢鱈に、關はず晝きなぐるのであつた。

抱一が其の頃の句に、

飛ぶ駕籠や時雨來る夜の膝頭

湯豆腐の慌しさや今朝の霜

今上る客は化物ほととぎす

此年も狐舞はせて遊びけり

夜櫻や箱提灯の鼻の穴

などは、皆此の時分に口吟んだものであつた。

二 大名の若殿が生活難

抱一の斯うした不身持に對しては、老臣共も眉を顰めた。けれども部屋住みでこそあれ、當生の爲めには叔父に當る、それを家來の身としてはどうする事も出来なかつた。打ち續く泰平には、大名旗本などの子弟に、斯うして自儘放縱な放蕩ものが出来るのは、實に無理もない事であつた。

抱一は名門でもあり、それに衆にすぐれた才氣があるといふ事を聞いて、諸家から養子の申し込みは雨と降るのであつた。中には備前の池田といふ大藩からは、幕府の内意をまで假りて望まれたけれども、遊蕩に馴れ、風流三昧に氣隨氣儘に馴れ

切つた抱一は、

「今更ら式作法の面倒臭い大名でもあるまい。」と言つて、盡く斷はつて了つた。

抱一が斯うして養子を斷はつたのについて若しや幼年の當主をつけ込んで、宗家を規ふのではないかと老臣共に疑心さへも懐かせるに至つた。それがためには焦心を翼々たる老臣共が、煩さく身邊を注視する様になつた。抱一としてはそれが亦煩くて堪らなかつた。

寛政九年、重陽の節句に、病と稱して出家を願ひ、翌十月八日築地門跡で得度し文如上人准連技として、等覺院少僧都文詮暉真と改めた。それは抱一が三十七歳の時であつた。一體酒井家の宗旨は禪宗であつた。それがため禪語の「庭前柏樹」に因んで、別號を「庭柏子」と呼び、茶道や俳諧に没頭してゐた抱一の事であるから、



眞に得道の志を以て出家するのであつたならば、禪門に入るべきは當然であるが抱一は決してその様な殊勝な心掛は有つて居なかつた。實は法衣に隠れて、氣儘な放浪生活を遂げようといふのが、得道の第一の目的であつた。肉食妻帯随意の本願寺派の宗法を擇んだのもそれがためである。

それは、

遯るべき山ありの實の天窓かな

と、剃髮早々から洒落たのでも判る。抱一は宗家から千石十人扶持を貰ふ事になつてゐるだが、それは京都住居といふ約束であつたので、霜月三日に江戸を發足して、京に上るには上つたが、寺などへは入らず、木屋町の貸席に逗留しては、

蒲團着て寝て見る山も東山

と洒落れ、或ひは朱雀野に日を暮らしては、

島原のさらばノや霜の聲

などと口吟み、住居どころか物見遊山のつもりで、半月ばかり遊び暮した後、師走の十四日には、病だと云つて再び江戸に舞ひ戻つた。そして矢張り寺には入らないで、吉原に近い叢輪に住んで、氣兼ねのない太平樂な日を送つてゐた。そんなために、宗家への出入りも自然と出来なくなつて、仕送りの途も絶えてしまつたので、自分の心柄とは云ひ條、大名の若殿ともあらうものが、はじめて生活難を感じる様になつた。抱一が俳人として、繪師として、世の中に知られる様になつたのはそれからであつた。

抱一は俳句を其角の遺風に私淑し、其の書風までも學び、繪は土佐光貞、圓山應

舉、渡邊南岳、谷文晁の風になづんだ後、遂ひに光琳に歸嚮した。そして全く藝を以て渡世する外はなかつた。

### 三 吉原の遊女を根曳して宿の妻

抱一は其の後千束村に閑居してゐたが、後また淺草觀音境内、辨天山のいろは長屋に引き移つた。それは朝夕の用達に便利だといふところからであつた。それより前抱一は、吉原玉屋山三郎の抱へで、二枚目を張つた誰袖華魁を根曳して宿の妻とした。本名をおちか、號を小鷺と與へた。此の女は繪筆をもつ事も知つてゐたが、抱一は此の女に、生涯廓言葉を改めさせなかつた。

かうして放逸な抱一も、妻も有てば技藝を渡世とする様になつては、自然朝夕の用達しにも便利なところといふ様な、人並の事も考へなければならなかつた。

一日の事であつた。抱一上人の草庵を訪ねたのは、其の頃聞えた茶商、鴻池儀兵衛であつた。儀兵衛は抱一の畫風を殊の外喜んで居つた。

「御免下さい。先日は誠に有り難ふございました。誰に見せましても、羨まぬものとは一人もございませんでした。今日はちよつとお禮の印までに参りました。」と言つて、供のものに持たせた進物をそれへ出した。

抱一も快く之れを迎へて、一室に儀兵衛を案内した

「いや、ようこそ御見えなされた。さア、寛いで下され。」「いえ、もうこれで結構でございます。」「これは儀兵衛さま、よっおいでなんした。お出花一つおあがなんし……。」と、それへ茶を汲んで出たのは、おちかの小鷺であつた。

「時に儀兵衛殿、度々結構な進物を貰つて恐縮だが、これからは一つ方を變へて貰

いたいと思ふが……。」「これはどうも、甚だ行き届きませんで、何かお望みの品でもございましたら、どうぞ御遠慮なくさう仰しやつていたゞきたう△います。」「いや、品物に何も不足や望みは無いが、俺もかうやつて繪師が渡世となつて見ると、以前の身分とは違ふ。これからは品物を貰つたよりも、潤筆料として貰つた方が都合がいいが……。」「意外な言葉に、儀兵衛は、

「いや、貴方様の方でさう仰しやつて下さると、私の方でもどの位氣安いか知れません。實は御身分柄、お目録で差し上げましては失禮様と存じますところから、何にせうか、之れにせうかと、實はどの位心配を致して居りましたか知れません。それに潤筆料をお取り下さいますとすれば、此様な喜ばしい事はございません。」「實はな、俺もかうやつて渡世をして見て、はじめて金の有り難い事が分つたのぢ

や。は△△△△△。』

抱一の笑ひ聲は高かつたが、何處となく言ひ知れぬ淋しさがこもつてゐた。

「處で、如何でございます。豫ねてお願い致したいと存じて居つたものがござい  
ますが。」「ほら、何か知らぬが、他ならぬ此方の頼み、描きものかな。」「有り難ふ  
△ひます。實は深川の冬木屋が秘藏して居ります、光琳寫しをお願ひ致したいの  
でございますが。」「あゝ、あの何か、八橋の繪屏風か。あれなら俺も知つてゐる。  
頼まれるまでもなく、寫して置きたいと思つてゐた所ぢや。よし、早速描いてやら  
う。」と答へた。

深川の冬木屋といへば、其の頃有名な大家で、今だに冬木屋の名を留めてゐる、  
あの殆んど一町を有して、冬木辨天なども、其の邸内に鎮座されて居つた。尾形光

琳が京から下つた時、暫らく此の冬木屋に寄寓してゐるが、其の時有名な杜若に八ッ橋の一雙も揮毫したのでつた。

抱一は儀兵衛から依頼された八ッ橋の光琳寫しに丹精を籠めた。儀兵衛は抱一から出来上つたといふ報知の來るのを、首を長くして待つた。

#### 四 碎けきつた抱一

「おゝ、これは見事に出来ました。」

鴻池儀兵衛は、光琳寫しの八ッ橋が出来たといふ報告を得て、抱一の草庵へ飛んで来て、先づ畫面を見て恍惚とした。

「何しろ原圖があまり立派ぢやで、相應に骨を折つたが、なか／＼及ぶところでない……か、だうぢやな、氣に入つたかな。」結構でござります。光琳が生きて居り

ましても、恐らく此の上はござりますまい。」

儀兵衛は口を極めて嘆賞した。

「つきましては、失禮でござりますが、潤筆料は如何程差上げたら宜しうござりませうか。どうか御心措きなく仰しやつて頂きたうムりまする。」は、ムムム扱てとなると、幾ら貰つて宜いのか、俺にも頓と分らぬ。」と一寸首を傾げて居たが、偶と名案でも浮んだやうに、はたと膝を叩いて、

「どうぢや。花も蕾も混みにして、一つ一分宛といふことにしては……。」

抱一の潤筆料の標準は益々奇であつた。儀兵衛も思はず噴笑した。けれども抱一は極めて眞面目であつた。

「如何ほどになりますか存じませぬが、それで宜しうござりませうか。」と、儀兵衛

も眞面になつた。

「此方さへよければ、俺は構はぬ。橋と水だけは負けぢや。はゝゝゝゝ。」「恐れ入ります。」「若し高かつたら此方の損と諦らめて貰ふ迄ぢや。」と、抱一は氣輕に言ひながら、側にあつた碁笥から碁石を掴み出して、

「小鸞、其女も手傳ふのぢや。」と、小鸞にも手傳はせて、一雙の屏風を座敷に擴げ、露をもふくむかと思ふばかりの、紫匂ふ杜若の上へ、一つ一つ碁石を置いた。儀兵衛は其の碁石の數よりも、奇人の此の奇行を、いと面白きことに思ひながら見て居つた。

「さア、濟んだやうぢやな。どうぢや小鸞、もう残りは無いかな。一つ見落せば一分の損ぢや。見落すまいぞ。」「おほゝゝゝゝ、主もまア、慾張りになりんしたなア」

と、夫婦は睦まじく笑み交はしつゝ、二人がかりで列べた碁石を集めにかゝつた。儀兵衛も笑つた。

さて、集めた碁石は百餘りあつた。儀兵衛は其の數に應じて三十兩の潤筆料と、他に鶏卵、反物などを添へて贈ると、抱一は一禮を述べて、

「さて、俺も繪を描き初めてから、潤筆料を貰うたのは抑も初めてぢや。今日は此方が旦那ぢやから、心ばかりの祝ひをしやう。」と、自ら先きに立つて、駐春亭へ儀兵衛を伴つて馳走をした。

儀兵衛が抱一から、三十兩の潤筆料を拂つて描いて貰つた繪屏風は、其後儀兵衛が家政を整理しなければならぬ破目に陥つた時、靈岸島の大黒屋といふ出入りの鱧屋が、二百兩で引き取つたが、其の後更に高價を以て、岩崎家を買ひ取られたが、

今尙ほ同家にある筈である。

抱一がまだ千束村にゐる時分、鏢暮しの氣晴らしに、蜀山人や、或ひは友の加藤千蔭や、其の他の友とよく八百善に行つて飲んだものだ。處がいつも歸りが遅くなると、どうも道が暗くて困る。そこで抱一は一策を案出した。それは他でもなかつた。幾つもの白張の提灯を挑らへて、それには一々「千束隠士」と自ら署名して、八百善に預けて置いて、他の客でも勝手に持つて行く様にした。これは抱一の自家廣告の一つであつたが、果して功を奏して、抱一の名は益々擴まつた。と同時に、「なるほど好い思ひ附きだ」と、他の料理屋でも、之れを真似る様になつて、現今でも其の名残を留めてゐるが、あれは皆抱一の創案で、八百善で出したのが抑も嚆矢であつた。

文化三年には、其角の百回忌を營んで、追悼のために肖像百幅を描いて知己に頒つた。

囀れや魔佛一如の花むしろ

といふ句は、其の時のものであつた。それから、越えて五年九月には、親友とたのむ加藤千蔭を喪つて、

唐錦やまともに見ぬ鳥の跡

といふ追悼の句を手向けた。

加藤千蔭も一種の奇人であると共に、大の通人であつた。(別項で説く)其の頃、前十八大通と稱されるものがあつたが、千蔭も其の一人であつた。斯ういふ人物とのみ交はつて、其の意氣がりに煩はされたため、抱一の句も繪も、動ともすると

輕浮に流れ易かつた。抱一の句や繪が、高雅の趣きを缺くと謂はれたのも、實はそれ等が因を爲してゐたのだつた。

抱一は友の千蔭を喪つてから、足掛け十二年間、數奇な境遇に自ら弄ばれたが、やがては其の羽を伸すことの出来る時代が來た。

##### 五 羽を伸す時節到來

抱一の技倆は、年を逐ふと共に進んだ。それと共に、時代も移り變つた。白河樂翁の寛政大改革も、いつしか弛んで十一代將軍家齋の代の、所謂文恭院時代の榮華に夢見る世界は展開せられた。公儀に憚るところがあつて、永年音信さいも斷つて居た抱一の宗家でも、藝術家が重んぜられる世となると、當年の厄介者であつた若隱居の抱一が、名匠として持て囃されてゐるのを見ると、寧ろ家門の譽れとして、

厄介視して疎んじてゐた老臣共も、進んで往來する様になつた。それはあたかも掌をかへすが如くであつたので、抱一は可笑しくてならなかつた。そればかりでは無い。絶えて贈らなかつた定め扶持の外に、繪具料までも添へて贈る様になつた。そして、更らに名分を立てるために、築地門跡の寺中に、地所を進めて表面そこへ引き移るといふ事に、世間禮を繕ふ肝煎までした。

文化六年、四十九歳の時、抱一は根岸大塚の里へ移つて、其の庵に「雨華庵」と掲げ、畫房を「鶯村畫所」と呼んだ。此處に移つてからは、門人の數も殖えたが、晝の間は門人を相手に、熱心に繪を描くが、夕暮れになると、アンボツの駕籠に乗つて、雨の夜も風の夜も、凡そ如何なる晩でも、而かも元日から大晦日まで、一夜として缺がすことなく、廓をひと廻りして來なければ眠れないといふ癖をつけた。そして

廓のうちに、遊女の弟子があまた殖えた。當時全盛第一と謳はれた、丁字屋の雛鶴花魁も其のうちの一人であつた。

抱一は自ら鏡に向つて自畫像を寫し、表装の好みに數奇を凝らし、箱は桐の柘目を擇ひ、蓋あ表には「雛鶴藏」と、キリ、とした其角風の書體で箱書をして與へたりなどした。

抱一の名は、廓のうちでも知らぬものはなかつた。否な名どころか、抱一の顔を知らぬものは、吉原のものではないといふまでに能く知られてゐた。そして年季の明いた遊女で、別に身を寄せる處のない様なものがあると、それを自分の家へ連れて來て、自ら媒妁をして知己や門人の女房にするのであつた。さういふ遊女が十數人と數へられた。

或る時の事であつた。抱一は八百善に行つて初鯉の刺肉に箸をつけたが

「あつ、これは不可。ちよつと板前を呼んで呉れ。」「畏まりました。あの何か粗劣でもムいましたか。」「いや、さういふ譯ではないが、少し訊いて見たいことがあるのぢや。」

やがて料理人は恐る／＼それへ出た。

「おゝ、お前か板前は、外でもないが、今日の刺肉は研ぎ立ての庖丁でつくつたのぢやないか。」「へい、左様でござりますが、何うか致しましたが。」「然うだらう。道理で刺肉に砥石の氣が移つて居る。俺が致へてやる。刺肉庖丁はな、研いだら井戸側の中へ吊して置いて、二刻も経つてから使ふのが口傳だ。可いが、覚えて置け。はゝゝゝゝいや御苦勞だつた。」と笑つたが、此の一言に料理人は舌を卷いた。抱一



の食通は茶三昧から來たのだつた。酒は一滴も飲まなかつたが、それでも酒席の應酬には少しも屈托しなかつた。其處がまた通の通たる所以であつたのだ。

龜田鵬齋は、人を人とも思はぬ豪宕不羈な男で、自ら酒中の老仙を以て任じてゐるほどであつたが、抱一とは深く交はり、曾て豊彦の裏白とこゝ柿を畫いた繪に一緒に讀をした事があつた。

鵬齋は芭蕉の「蓬萊に聞かばや伊勢の初便り」をもじつて、

屠蘇の後我も聞かばや酒の爛

と戯れ書くと、抱一は直ぐそのあとへ、

こゝ柿に我も立てばや茶一盃

とやつてのけた。下戸黨と上戸黨、其の好むところは全然反對でも、互ひに世に拗

ねて世に容れなかつた氣象は共通して、樂翁の寛政改革に對して、反抗の態度を執つたなども、共に同じであつた。兩人が交りを深うしたのは、原その事が縁を爲してゐた。

名門の出、等覺院大僧都抱一上人の住宅といへば、何んなに立派な、そして數寄を凝らした住居であらうかといふことは、知らぬ人々の想像する處であつたが、其の實はそれ等の想像をすつかり裏切るもので、辨天山のいろは長屋に比べると、唯だ僅かに家屋敷が廣くなつたといふに過ぎなかつた。それは元百姓家であつたが、買い取つたまゝで碌に手入れもせず、茶室を建て増したのみで、廁の戸なども百姓が居た時から、栓が取れて風の吹く度にぱた／＼音がしてゐたが、其の儘直しもしなかつた。

「根岸へ上るのもよいけれど、天井が落ちはせぬかと氣味が悪うくてならぬ。」とは  
 栖霞といふ女弟子が愚痴を呟したと云ふ。それほどに構はない住居であつた。栖霞  
 は豪商伏見屋五郎作の妻女であつた。月のうちに幾度か通つて來るものでもそれな  
 のに、此處に常住してゐる抱一上人や小鸞は一向平氣であつた。

「たとへ住居は古ほけて居ても、垣根の竹が青々となると、なんだか今にも春が來  
 るやうで、まことに氣持のよいものぢやテ。」

今日しも出入りの植木屋が來て、建仁寺垣を繕ひ替へてゐるのを見ながら、椽側  
 からかう言つた。

抱一は年々庭前の建仁寺垣だけは、暮になると必ず青竹で結び替へさせるのであ  
 つた。

「青竹の磨きが濟んだら、序でに其の古い方の竹も磨いて置いて呉れ。」「へい、こ  
 れを何うなさいます。」「ちよつと趣向がある。磨いたら五六寸位宛に切つて、棕櫚  
 繩でザツと編んで、吊すやうにして置いて呉れ。」「へい、畏まりました。」植木屋は  
 こんなものを、一體どうしようといふのだらうと思ひながら、吟附られた通りにし  
 た。抱一はそれを背戸の簷下に吊させた。

春になつて、大雪が降つた事があつた。其の軒前の植木屋は、庭の竹などを見舞  
 ひのために抱一上人の雨華庵を訪れると、抱一は機嫌よくさし招きながら、

「いや、御苦勞であつた。此方へ來い。」と、植木屋は勝手口から臺所の圍爐裡の側  
 へ呼び入れられた。抱一は自分も其處に坐つて、

「雪の日の馳走は何よりも火ぢや。植木屋に馳走をしてやんなさい。」と小鸞を顧み

て言つた。當時小鸞は美しい尼になつてゐた。それは文化十四年の六月、宗家の屋敷へ願ひの上、法能として妙華と號してゐた。そして其の名目はお附女中としてであつた。

小鸞は植木屋が暮れに編んで背戸の簷下に吊して置いた丸竹を抜きとつて来て、それを井桁に組んで爐の火に翳した。竹は煙りもせずよく燃えた。

「はゝ……何うだ。煙もなく、刎ねもせず、斯の様に結構な焚火はあるまい。」と言つた。植木屋は暮に抱一がちよつと趣向があると云つたのは、此の事であつたかと思ひ當つて、膝を撲つて感嘆した。

#### 六 晩年の抱一

「逆も今度は六つかしい。また存へようとも思はぬ。致たい事は爲盡して了つた。」

何も思ひ残す事はない。唯だ後の事を頼んで置きたいから、伏見屋を呼んで呉れ。」

雨華庵に病んで、また起つ事の出来ないと観念した抱一は斯う言つた。

栖霞の夫伏見屋五郎作は、豫ねて酒井家の御用達を勤め、また兩華庵の一切を賄つて居つたのだ。茶にも俳諧にも趣味を有つてゐて、抱一とは親しくしてゐた。殊

に河東節仲間として矢張り當時の大通の一人で、本姓は森川佳禰と稱して居つた。

流石に拗れ者の抱一も、年と共に其の圭角も自然取れて、宗家の扶持を受ける様になつては、自分の歿後の事なども案ずるやうになり、剃髪した妙華には香坂雪仙の二男八十丸を貰つた。雪仙は市ヶ谷浄榮寺に住んで、抱一とは文墨の交はりがあつた。此の八十丸に雨華菴の二世を嗣がせる事にしたが、それなども一々宗家の許しを受けた。かうして、何時死んでも心残りのない様に用意をして置いたのだつ

た

急を聞いて伏見屋は其の枕許に馳せつけた。抱一は徐ろに、伏見屋五郎作を始め、妙華尼、葛浦(養子八十九丸)などに後事を托し、多くの男女の門弟の看護のうちに、一代の奇人で、そして秀抜の才を發揮した抱一は、眠るかのやうに遷化した。それは文政十一年霜月二十九日の事で、行年六十八であつた。

酒井家の當主雅樂頭忠實は、肉親の叔父の計を聽いて、愴惻として駕籠を雨華庵に向はせた。そして初めて雨華庵の見すほらしい態を眺めて、

「此の様に穢い處に、叔父上をお置き申したのであつたか。」と思はず暗涙に啜び、葬送の後本邸から、奥向の化粧室を移して改築したので、雨華庵は抱一の死後却つて立派になつたが、明治初年に放火のために灰燼に歸したのは惜しい事であつた。

抱一の墓は築地の本願寺にあるが、妙華尼の廓言葉は、當主雅樂頭の興に入り、其の後も折々本邸へ出入りしてゐるが、天保八年十月二十七日、恰かも抱一に遅るること十年で歿つた。

抱一が、曾て格式作法の大名などになるを厭ふて吐いた句に、

大名は鸚鵡に似たり年の暮れ

と云ふのがあるが、此の一句を見ても、如何に捻くれものであつたかが判る。

また文化の末に鶯鳴の植木屋が、初めて菊人形を作つたが、それが江戸中の大評判となつた。すると抱一は、

見劣りし人の心や造り菊

と嘲けた。

抱一は繪を残したばかりでなく、斯ういふ句も傳へたが、尙ほ他に「新曲」洲崎の汐波み」があり、「河東節では「青すだれ」、「夜の編笠」、「火取蟲」、「江戸簞」などは傳誦されたものの重なるものである。

## 子松山心

### 一 茄子の木に頼つた錢

山心は雲州松江藩の弓術師範の家に生れた。山心とは老年に及んで號したもので、姓は子松、名乗を時達、通稱を源八と呼んで居つた。若い時、兄の過失のために、彼も巻き添へを喰つて祿を離れ、國內大原郡に蟄居して、百姓の群に交り、食しいためには其の日其の日を暮すのに、日傭にまで落魄たのだつた。

源八は人爲方正淳朴であつた。それにお武家あがりといふので、村人達からも尊敬されて居つたが、彼は決して高ぶるやうな事もなく、腰を低うして、雇はれて行けば先方の主人を、「旦那々々」と呼んで、自らへり下るのであつた。

或る夏の夕暮れのこと、源八は何處からか、汗じみた単衣に冷飯草履、埃まみれになつて戻つて來た。貧乏暮しの、家財道具とても無く、盜賊に覘はれることもない氣樂さには、何時も門口は締めなかつた。ガタピシと門の戸を開けて入つて見ると、背戸の方で近所の百姓の娘が、何やら水仕事をして居るのが目についた。

「誰かと思へば、お光どのか、精が出るのう。」

「おや源八さん。歸らしやんしたか。あんまり取り散らかしてあつたゆゑ、ちよつと掃除をして置きましたぞへ。」それはく、いつもながら忝けない事ぢや。だが、もう暮れに間もない。また家でも忙がしい時分ぢや。早う歸らぬと、叱られますぞ。」それはよう承知して居りまする。お行水の湯も沸して居りまするゆゑ、まあその汗を流さしやんせ。単衣もつくねてあつたのを洗つて置きました。よく乾いて居

ますほどに、浴みしたら着がへしやんせ。それは明日また洗つて置きまする。」それはどうも、ぢや、これからはさういふことをして下されぬ事ぢや。滌ぎ洗濯は曝の役、俺がするで構ふて下さるな。」なに、どうせ遊んで居りまするほどに、何の雜作もない事でございます。ほんまあ、世が世であつたら、わたしなどはかうしてお話しも出来ない御身分、いくら御浪人なされたとて、此の頃のお暮しはおいたはしい……わたしは氣の毒でなませぬ。」は、は、は、何を言ふのぢや。何もかも時世時節ぢや。まあ、鴉も塙に歸つて了ふた。暮れぬうちに歸つて下され。」それでは源八さん。悠くり休ましやんせ。」と、百姓の娘お藤は、心をのこして歸つた。その後で源八は、

「やれ、年もゆかぬに感心な娘ぢや哩。」と言ひつゝ、盥を背戸へ持ち出して、

眞裸になつて行水をはじめた。

「源八どの、お行水かの。」と聲をかけたのは、源八の家の裏の畑の持ち主、打ち續いた天氣のために、茄子の木に水を與へに來て居た百姓であつた。

「これはく、作兵衛殿、毎日厳しいことをごさるの。」「ほんによくつづきまするで……。」「降つてばかりも困るが、ぢやといふてつづいても手ぢやのう。」

源八は行水しながら挨拶をしたが、豫ねてから、其の畑の露さへ紫に滴り落ちるやうな茄子を見て、欲しくて堪らなかつた。これが何うかした人間なら、つい地つゞきの畑、減多に見てゐる者もないから、黙つて貰ふのだが、源八はさういふ事は薬一本だつて爲る男ではなかつた。

「時に作兵衛どの、甚だ無駄ぢやが、俺は御承知の通り一坪の野菜畑も有ちませぬ。

その茄子を少しばかり賣つては下さるまいか。」「茄子を賣つて呉れい。やれ、何を言はつしやる。こんなものを賣つて呉れなどと、お前様一人で食べさつしやる位は知れたものぢや。幾らでも構ふことはない。欲しかったら何時でも勝手に撈つて行かつしやれ。」「いやく、然うは行かぬ。他人の汗水で出來たものぢや。」「なアに……。」と言つて、百姓はなるべくよさ相なのを擇つて、幾つかを持って來て呉れた。源八は金を拂はふとしたが、百姓はどうしても取らないので、却つて恐縮をして、厚く禮を述べ、それを貰つて家に入つた。

翌日も亦、夕刻になると作兵衛は茄子畑に水を與りに來た。そして偶と見ると茄子の枝に、錢が紙摺で結びつけてある。それが一つでなく、幾つも幾つもあるので驚いたが、考へて居た作兵衛は、

「ははア判つた。あの物堅い源八どんが、買うといふて俺にやつても取らぬので、かうして結びつけて置かつしやつたに違いない。飛んでもねえ事をざつしやる。」と言つて、それを悉く集め、源八の許へ返しに行つたが、

「いや、俺は一向存ぜぬ。それは其許が無欲ぢやで、大方神様が茄子の木に錢を懸らしたのでござらう。」と言つて取らなかつた。

## 二 留守番と夜伽

「源八さんの様な物堅い人は無い。あゝいふ人は小判の中につづめて置いてても大事ない。」とまで、村人から信じられて、村一番の正直者となつて居た。

或る時であつた。村のさる富豪の家で、家内總出で留守になる事があつたが、それにしては留守居が要る。これは誰よりかも源八に頼まうと、源八のところへ頼み

に來たので、「畏まりました」と、源八は快く引き受けて、其の家へ行つたが、夕刻になると、戸も障子も悉く引き拂つて、家の中央にちやんと座り、傍らには弓矢を置き、八方に眼を配つて、終宵睡らなかつた。

けれども、また律義一偏なために失敗をした事もあつた。それは或る朝莊屋の妻が産をしたといふ事を聞いたので、彼は早速悦びに行つて、

「常々御懇意にあづかる拙者、今宵は夜伽に罷り越しました。」と言つた。すると主人の莊屋は大悦びで、

「それはよく來て下された。此の頃夜伽のみでみなも疲れ切つて居りまするゆゑ、それでは今宵はお頼み申しませう。誠に有り難い仕合せで……。」「いや、其の御禮では却つて恐縮ぢや。さア、緩くりと寝まつしやれ。」「有り難ふ存じます



る。では宜しくお頼み申します。」と言つて、主人をはじめ他のものも、それ／＼源八に頼んで床に入つた。源八は一人で産婦の枕許に座つて、一睡もしないで、産婦の方を見つめてゐたので、産婦の方が驚いて了つた。

翌朝源八が眼を告げて歸つた後で、産婦は所夫に向いて、

「源八殿の親切は嬉しいが、昨夜一と晩中顔を見つめて居られて、顔の置き場に困りました。もう／＼あの人の夜伽だけは、眞平にして下され。」と愚痴をこぼした。

「は／＼いやはあの物堅い、律義一偏の人ぢや。若しかちよつとした間にも、其女の容態に變があつてはならぬと思はつしやつたのぢやら……。」と言つて噴笑した。

### 三 百姓娘は親切と歸參の悦び

百姓の娘、藤は、源八が断はつても、矢張り源八の家へ出入りして、着物の洗濯をして呉れたり、綻びを縫つたり、家の中の掃除、煮炊きの事までも、忠實々々して世話をして呉れるのだつた。

お藤は醜い女であつたが、其の心は實に見かけによらぬ優しいものであつた。たとへ不經色でも、年頃の娘に持つた親は又心配だつた。それで男一人の源八の家へ、繁々出入りをする事を、厳しく禁じて居つたが、お藤は何彼と事に托しては家を出て、鰥暮しの源八の不自由を助けるのであつた。

源八も木石ではなかつた。お藤の親切はうれしかつた。よく承知をしてゐた。けれども何が扱て石部金吉といふほどの堅人のこと、決して猥な事をする様な男ではなかつた。

源八は斯うして、貧しい暮しを續けて居るうちに、嬉しい使りを手にする日が来た。それは外でもない、松江の城下から勅氣御免の報知が届いたのだつた。

「源八殿御歸參。さるさうな。何よりお目出度い事でござりまする。」と、村の誰も彼も、源八の歸參を喜んだ。今までの日傭は今日から立派な武士、村民は下へも置かなかつた。そしていよく出立の日には、數里の間を見送つて別れを惜んだ。けれども、何れもの顔には喜びの色がみなぎつて居た。中に人知れず涙に袖を絞つたのはお藤一人であつた。

源八が歸參してから、十四五日も経たぬに、お藤の家の門へ一挺の駕籠が停つて、中からは立派やかな武士が一人現はれた。武士は旅装束をして居た。

「願まう〜。一

訪へ聲に、

「はい、誰方でござんす？」と言つて出て來たのはお藤であつた。お藤は件の武士を一眼見ると、いきなり袂に縫つて、

「源八様でござりましたか。お懐がしうござんす。」と言つて、嬉し泣きに泣いた。

「お藤どの、拙者村に在るうちは、何かと親身も及ばぬ世話をして下され、其の御禮に今日は罷り越した。」と、言葉使ひさへも改めて禮を述べた。

「まあ、其の様な固苦しいことを仰しやらないで、さあ、どうぞお入りなさりませ。」

「御兩親は御在宿でござるか。」「あい、只今呼びまするほどに、とも角もお入りなされ。」

お藤は兩親に源八がこれ〜で、立派な姿で來たと知らしたので、裏の方で何や

らして居た夫婦のものも飛んで出て、

「やれ、まア源八殿、ほんに見違へる様な立派なお姿で、さアく、何を御遠慮なさる事はござりませぬ。すつとお上り下され。」と言はれ、源八も一室へあがつた。

四 醜婦を娶つた源八

座敷へ通つた源八は、先づ一通りの挨拶を済ませ、居座を正して、

「時にお藤どの、御両親、近頃甚だ無様な儀ではござるが、今日は鬼々折入つてのお願いがあつて参りました。」はてさて、改まつて、してそれは、どのやうな事でござりまする。「餘の儀でもござらぬ。お娘御お藤どの、手前、妻に下さる事は出来ずまいか。」えつ、何と仰しやります。俺どものやうな水呑百姓の娘、それも縹色はあの通り、お前様が村にござらつしやつた時なら兎も角も、今では立派なお

武士、月と鼈ほどの相異。「否やく、縹色や身分で手前は申し受けたいと云ふのではござらぬ。と申して、拙者村にある間には、お娘御に對しては、何の猥なこともござらぬ。それは神明に誓つて申上げる。唯だ浪々の長い間、心にかけて親身も及ばねほどの御世話、娘御の御懇情、心魂に徹して忘れ申さぬに依り、未だ他に御縁邊の御取り極めもなくは、是非とも手前申し受けたうござる。」

親娘の驚きと、悦びとは譬へんにもなく、夢に夢見る心地であつた。中にもお藤は恥かしいやら嬉しいやらで、袂を面にあてた。

「折角の御志、まるで夢でも見る様でござりまする。なれども娘はどう最負目に見ても此の不縹色、こんな草深い田舎に於て、行儀も作法も知りませぬ。こんな田舎でさへも誰れ一人見向いて呉れぬやうな娘を、どうしてお前様のやうな、立派な

お武士様の女房にと云つて、城下に出しますなどと申しましては、あんまり身の程を知らぬ様でござります。第一、お前様のいかい恥でござりまする。」

父親はうれしい中にも、かう言つて辭退をするのであつた。

「これはしたり。先刻より申す通り、手前は縹色や身分によつて申受けるのではござらぬ。お藤殿の心ちや。實は早計ながら、手前駕籠を以て迎へに參つたやうに次第でござれば、此儀何卒お聞き濟みにあづかりたい。」

素より両親にも、當人にも異存があらう筈がない。其の夜は親娘が心をつくして待遇し、翌日お藤を駕籠に乗せて伴つた。村の者は一人として、お藤の果報をうらやまぬものはなかつた。

城下に戻つた源八は、お藤と偕老同穴の契りを結び、いと睦まじく暮す事になつ

たが、浪々中の事や、またはお藤を迎へた事などか、何時か君公の耳に入つたので、君公の覺えも目出度く、やがて加増の恩命に浴した。家中のものは百姓の娘で、而かも珍らしい醜婦を娶つたのを、初めは笑つてゐたが、其の間の事情を聞くと、打つて變つて、彼の方正惇朴を賞揚した。

彼の射術の技は益々上達して、殆んど神技とまで讃へられ、其の名聲は隣國にまでも響いた。

此の物堅い源八は、それまでは盃といふものを持たなかつた。それでは酒は飲まなかつたかといふに、酒は飲んでも、飲む時は常に茶碗で間に合はせて居ただつた。

けれども、彼の名聲が高くなるにつれて、門弟のうちにも歴々のものが多くなり、

知行が増せば、それだけ交際も廣くなる譯。

「あなた。貴郎ももう以前とは違ひますから、せめてお盃位は御購めにならねば、外聞が悪うございます。」

妻のお藤はかう言つて勧めた。源八はじめてた成る程と思ひ、早速とある瀬戸物屋に盃を購めに行つたか、幸ひ氣になつたのがあつたので、値段など言ふが儘に拂つて、

「念のために訊いて置くが、よもや瑕物ではあるまいな。」と念を押すと、瀬戸物屋の主人は、

「へい、それはもう請合でございます。」と答へたので、彼は別にそれを改めもしないで購めて歸つた。

扱て歸つて妻にそれを渡すと、妻はそれを讀めながら検べて居たが、

「あなた。これは無瑕だといふてお購めになつたのでございますか。」「念を押したが、請合いちやと申すにより、別に検べもせず購めて參つたか、瑕でもあるのか。」

「これを御覽なさいませ、糸底が缺けて居りまする。」

言はれて源八が、見るとなるほど糸底が缺けて居る。而かも其の瑕が決して新しいのではなかつた。

「これは不覺……。」と言つて、源八は直ぐ其の足で、以前の瀬戸物屋にやつて來た。

「先刻此の盃を購める時、瑕の有無を糺したところ、其方が無瑕は請合ちやと申すにより、検めもせず、其方の言葉を信じて購めて歸つたが、歸つて検べて見れば、

かういふ瑕がある、これは近頃の瑕ではないぞ。何故偽はりを申した。」  
突然、頭から詰りつけたので、瀬戸物屋の主人は蒼くなつて、

「それはく、どうも相済みません。お代は只今お返し申しますから、どうぞお許しなすつて下さい。」平謝罪にあやまつた。

源八は今度は優しく、物静かに、

「身供は他人を欺むくといふことをせぬ。それがため、また他人から欺むかれるのも嫌ひぢや。代を返すといふが、其方は利得をしたいが爲めに、瑕物を欺いて賣りつけたのであらう。して見れば、價さへ得ればそれで本望であらう。身供も欺むきを受けなければ本望ぢや。双方の望みの叶ふた上は、返金するには及ばぬ。」と言ひ棄て、呆れた顔をして居る主人を振り向きもせず、スタク歸つて了つた。

### 五 断食して死す

或る時であつた。源八は或る骨董舗の店に刀の鐔を發見して、其の店に立ち寄り、

「此の刀の鐔の價は何ほどなるや。」と問ふた。

然るに主人が不在で、其の女房は、

「生憎夫が留守で確と判りませんが、何でも二貫文とか三貫文とか申して居りました。」と答へた。

源八は懐中から、二貫文と一貫文とを別々に取り出して、

「若し夫が歸つて、二貫文と言はば之れを與へ、二貫文では賣れなかつたと申したら、此の一貫文を與へて呉れるやう。」と言つて、三貫文の金を置き、件の鐔を持つ

て歸つた。

自分自ら些かの偽はりもない源八は、亦人にも偽はりなどはないものだと思つてゐたので、何を購めるにも、決して値引きをさせるといふ様な事がなかつた。それで、妻は勿論、召し使ひのものに至る迄も、自然と其の風に感化されて、出入りの八百屋、角屋などに對しても、高いのどののと文句を言ふやうな事がなかつたので、終ひには商人の方でも、源八の家では決して價を二つに言はなかつた。此の美風は、奴僕にまでも價値がついて、源八の家に雇はれてゐたものと云へば、質朴で偽はりを言はぬと言ふので、我れ勝ちに争ふて召し抱へるのだつた。

源八は老いて隠居をなし、山心と號したが、それでも射術にかけては神技を現はして居た。然し、齡八十に垂んとしては、眼力がいたく衰へ、的さへも確と見極め

ることが出来なくなつた。が、門人が側に居つて、二寸とか、或ひは三寸とか言つて。言葉を添へると決して圖星を外さなかつた。其の腕前には、如何なる人も驚嘆せぬ者は無かつた。

或る時、門人の口添へで、弓矢をとつて見たが、流石に老いては、足を踏みしめる力さへも無かつた。ピユエツと射て放つた矢は、意外にも的を外れた。

「どらぢや。外れたであらう。あゝ、麒麟も老ゆれば驚馬とやら、俺の弓矢ももう終りぢや。」

山心は嘆息をして弓を投げ出した。一時の氣休めなどを肯く様な山心でない事をよく知つて居た門人達は、何と慰める言葉も無く、何れも顔と面を見合せて、感慨無量の思ひであつた。

射揚からあがつて来た山心は、急に湯を命じて、身を清めた上佛間に入った。

「藤は居らぬか。藤や、藤や。」「はい、何ぞ御用でございまするか。」

斯う言ひながら入つて来た妻のお藤も、曾て山心が浪人中の面影は何處へやら、もう頭には霜をいただいで居つた。

「倅はまだ退らぬやうぢやの。」「はい。」「では其女だけに申し聽かして置く。ずつと進みなさい。」

夫の改まつた様子、其の言葉と言ひ、何事ならんと、お藤は進みよつた。

「藤や、其女と夫婦になつてから、もう彼れ是れ六十年ぢや。俺も取る年で眼は霞み、腕は萎へて、門人の口添へで、漸く射て居た矢さへも射損じる様になつた。俺が上からお扶持を頂いてゐるのは弓矢ぢや。それに弓矢が役に立たぬ様になつては

天命が近づいた證據ぢや。斯く上の御役に立たぬやうな身になつて、食を喰むといふのは勿體ない。生き存らへても無益ぢや。永年連れ添ふて、俺の心は能く存じて居る其女ぢやによつて、これだけは申し聽かして置く。今後何の様な事があつても、決して俺の心に逆らふな。」

山心は嚴そかに言ひ聽かして、其の日から斷然食を斷つた。家人は心配して、言葉葉を盡して勧めたが箸を取らなかつた。あまたの門人も、代る代る勧めた。それでも、一度斯うと覺悟をした山心は、斷じて其の心を翻へさなかつた。

山心は一室に閉ぢ籠つて絶食して居たが、遂ひに床について了つた。或る日國家老三谷半太夫は山心を見舞ふた。

「御家老、三谷様が御見舞でござりまする。」



「何、御家老の御越しとか、それは恐縮、穢い處ちやが、粗忽のない様御案内申せ。」

斷食して床には就いてるても、氣はたしかであつた。けれども身體は衰弱してゐた。やつと起き直らうとして居る處へ、

「あいや、其の儘、其の儘……。」と劬はりながら、家老三谷半太夫は入つて來た。半太夫は山心とは師弟の間柄であつた。

「承はれば、先生はお食事も進みかねるとの事、失禮とは存じましたが、手前宅よりの粥を煮させて持参いたしました。聊かなりともお箸をおつけ下さらば、有り難き仕合せに存じます。」

半太夫は自ら給仕をして、箸をとつて山心に進めた。

山心も其の志には黙し難かつたか、押しただいて、一口は喰み下したが、二口目には吐き出して、

「御懇情は忝なく頂戴仕りましたなれど、手前の病は食を受け入れぬ病でござれば、餘りはどうぞ其の儘に願ひたい。」と言つて食はなかつた。かうして山心は斷食して遂ひに死んだ。

山心は何頃の人だつたか詳かでないが、國家老三谷半太夫は、松江の藩祖直政が寛永十五年、雲州に移つてから召抱へられた人であるから、或ひは同時代の人であつたかとも思はれる。三谷氏が松江の代々の家老であつたから、後にも半太夫を名乗つた人があつたかも知れぬが、其の邊は明かでない。併し山心も一代の崎人であつた事は争はれぬ事實である。

## 會呂利新左衛門

## 一 秀吉を馬鹿にした落首

秀吉は四國の長會我部元親父子を攻むるために、自ら本陣を堺に置いて、其の軍勢を四國に送つた。そして戦ひはしめてから既に八ヶ月、更らに埒が開かない。遺がの秀吉ももどかしく思つて居ると、或る朝の事であつた。

「はッ……。」「治部、何ぢや。」「恐れながら君に申上げます。只今家來のものが斯かるものが彼處の四辻に貼つてあつたと申して持参いたしました。」「何ぢや、認めてあるのは。」「實に怪しからぬ事でございます。」「うむ、見せい。」秀吉は三成の手から受取つて見ると、

秀吉が四このこめを買ひかねて

今度もごとかい明日も御渡海

と認めてあつた。秀吉の満面には朱が注がれた。

「うむ、無禮千萬、如何なる者の仕事なるが、治部、確と取り調べい。」「仰せまでもなく、既に取り調べましてあります。」「取り調べたとか、何と言ふものゝ仕事ぢや。」「當地南莊の韃師會呂利新左衛門と申す者と相判りました故、早速召捕つて置きましてござりまする。」「うむ。然らばこれへ引け、予が直々に吟味致すぞ。」  
「はッ……。」

やがて庭前に曳き出された坊主天窓、ぴつたり低頭平身した。

「韃師新左衛門と申すは其方が、面を上げい。」

新左衛門はなか／＼面を上げなかつたが、重ねて三四度言はれて、やつとあけた顔を見ると、今までカン／＼に怒つて居た秀吉も、思はずブツと噴笑した。それは新左衛門が、其の言語動作の外に、其の容貌からが、頗る滑稽味を帯びて居たのであつた。

「斯左衛門とやら、其方は予を侮辱致した落首を辻々に貼り出せしと云ふが、確と相違ないか。」落首を貼りしたのは事實でござりまする。「何の意趣あつて致した。有體に申せ。」恐れながら申上げます。私は決して上様を侮蔑に致した譯ではございませぬ。却つて上様の事を思ふての落首でございませぬ。「それはまた如何なる譯で。」然らば腹藏なく申上げますが、上様は元尾州愛知郡中村の百姓……。」近臣は何れも面を見合せて、デも不敵な奴らやと肝を潰した。新左衛門は一向平

氣で、

「然るに一度信長公に仕へて御馬の口取り、それより足輕……。」

堪りかねた石田治部三成、

「町人、無禮であらう。控へッ」と叱りつけた。

「御叱りを蒙りましても、物には凡て順序といふものがござりまする。兎に角百姓からして今日の様な貴い御身分にならせられましたので、上の事も下の事も能く御存知の筈にございませぬ。然るに近頃は上のみを御覽なされて、下々の事は顧みたまはず、それがために下々の難澁は一通りではございませぬ。と申しますのは、今回四國御征伐につきまして、諸國から入つて来る船は悉く差し止められ、供奉の諸大名はドシ／＼物品を御買ひ上げになるので、當地の物品は何品に拘はらず、法外

の高値となり、町人の困難は實に言葉にも盡されませぬ。此の儘何時までも斯く數萬の軍勢を當地に留め置かせられるに於ては、町人どもは何れも餓死せぬばならぬ様な事になりますので、實はあの様な落首を致しましてござります。」

新兵衛門は怯めも憶しもせなかつた。淀みもなく言つて、下唇をペロリと嘗めてケロリとした顔をして居た。

「うむ。予を秀吉と思はぬ豪膽な奴、治部、予が目通りに於て斬り捨てい。」はッ……。」

治部は一刀の鞘を拂つて、新左衛門の側へ近よつた。

「新左衛門とやら。」忝けなふ存じます。殿下の御前に於て、而かも石田治部少輔三成殿の双に命を括てる、新左の死花と申すもの、いざ速かに……。」

新左衛門は首を差し伸べた。三成は振りかざした太刀を、えいッと打ち下さうとした。

## 二 長會我部の犬

此の時新左衛門は、三成の顔をひよつと見上げてにやりと笑つた。それがため三成拍子抜けの體。又振り上げると、新左衛門にやり。又拍子が抜ける。

「治部、其奴の首が折れるか。」はッ、恐れながら、恐るべき豪傑にござりまする。「さもあらう。其奴は町人ながら豪膽な奴ぢや、式を致せ。」はッ……。」

三成は太刀の背で新左衛門の首を打つた。

「新左衛門とやら、特別の情を以て助命いたす。就ては、予が四石の米を買ひかねてといふのはどうぢや。」有り難き仕合せにござりまする。さそれはさうお取り遊

ばしますから御腹が立ちまする。「うむ。然らば何う取ればよいのぢや。」「然れば  
 でございまする。恐れながら上様は、亂れた世の中をお治め遊ばしました。乃で  
 私が申しまするこめといふのは、五穀の米の意ではなうて、四國の長會我部の事  
 でございまする。」「とは又如何なる譯ぢや?」「上様は今や關白の職にあらせられ、  
 天下に弓を引くものはございませんが、四國の長會我部のみは、上様も今日も昔時  
 の上様と心得、何時までもお膝元に従はぬのは、女よりも淺慮な奴でござります  
 る。つまり小さい女の心のやうだといふところから、四國のこめと申したのでござ  
 りまする。」「うむ。然らば、買ひかねてとはどうぢや。」「それをまたお取り違へ遊  
 ばして居られまする。その四國の長會我部をお討ち遊ばすのに、貝や鐘で、今日も  
 明日もと澤山の軍勢を御渡海させ給ふといふところを、遂ひ好きな道でござります

るから、狂歌に詠んだ次第でござりまする。」

これ聞いた秀吉の機嫌は直つに。

「新左、其方は今日より、予の伽役を申しつけるぞ。」「有り難き仕合せに存じます  
 る。」

非凡の肝王を賣りものに、却つて出世をした新左衛門は、其の日から秀吉のお伽  
 の役を申し付けられた。すると翌日、新左衛門は昨日に變る武士の姿でやつて來  
 た。

「はッ……。」「うむ。昨日の町人が、どうしたのぢや。今日は武人の姿を致して居  
 るが。」「はッ、此の度天下にならびなき、豊臣秀吉公のお伽役として召し抱へられ  
 ましてござりまする。」

秀吉は何も武士に取り立てると言つたのではなかつた。けれども、斯んな風に押し賣りをされては止むを得ない。秀吉も苦笑の外なかつた。

「時に上様、一つ浮びました。どうぞ御覽下さるやう。」「ほう……。」

新左衛門がスラ／＼認めて差し出した。秀吉が受取つて見ると、

辨當のむすびをほればなづく犬

手をくれるまで遊ぶ春の野

とあつた。流石の秀吉にも分らなかつた。

「新左、これはどういふ譯ぢや。」「左様でござりまする。只今上様が御征伐になつてお在でになります。長曾我部は犬でござりまする。犬といふ畜生は、食物を投げて與るとなづいて參りますが、吠えるからと申して、竹や棒で逐ひ拂へば、一層

吠えつくものでござりまする。乃で此の四國の犬奴も、何か食物をお與りになつて、彼方からなづいて来るやうに遊ばしては如何でござりまする。」

秀吉は礎と膝を打つた。

「うむ。よく申した。」

翌日は早速四國征伐の軍に直ちに引き揚げよといふ命を下し、秀吉は堺の陣所を引き揚げて桃山の御殿に歸つた。そして、長曾我部には種々る恩典を與へたので、新左衛門が言つた通り、果して秀吉の麾下となつた。新左衛門は益々秀吉の氣に入つて、秀吉に随つて桃山に來た。

### 三 大きな狂歌と小さな狂歌

新左衛門は和泉大島郡の人、(一説には三河の人ともいふ)後堺の新莊に出て、刀

の鞆師となつたが、姓は杉本（或は坂内、又は中川とも云ふ）初めは甚右衛門（又は嘉右衛門とも言ふ）と稱して居たが、剃髪して宗祐と云つた。通稱會呂利と云ふのは、彼の作つた鞆は何の滞りもなく、そろり／＼と納まるといふところから命じたのだといふ。天性慧敏で、和歌狂歌の道に長けて居つた。其の稼業柄に似合はず、常に閑室に居つて、家に擔石の儲けがなくとも、頗る晏如たるものであつた。香技を志野宗心に受け、茶事を好んで居た。（一説には武野紹鷗の門とも云ふ）新左衛門は滑稽酒脱で、非常に奇智に富んで居つた。その天性の奇智によつて、或る時は秀吉を慰め或る時は勵まし、また或る時は怒りを和らげなどしたので、禿吉と云へば會呂利と後人に稱せられるほど氣になつて居つた。

或る時であつた。禿吉は諸大名を召して、成るべく大きな狂歌を詠めと仰せられ

た。すると第一番に進み出たのは徳川家康であつた。

武藏野に咲きはじまりし梅の花

天地に響く鶯の聲

と詠むと、次ぎに前田利家が、

富士山を枕になして寝て見れば

足は堅田の浦にこそあれ

と詠めば、上杉景勝は、

須彌山に腰打ちかけて大空を

笠に被れど耳は隠れず

次ぎに蒲生氏郷が、

須彌山に腰打ちかけし其の人を

まつ毛の先きで突きとばしけり

「うむ。なるほど大きいのう。では、今度は予が致すぞ。」

山根づけ海中着に川は紐

緒は三五十五夜の月

とはどうぢや。」

一同は低頭平身。

「恐れ入りました。」「恐れ乍ら上様、新左奴が一首仕りまする。」「うむ、新左か、まだ此の上に大きい事があるか。」「まだノ、上様や諸侯方のお歌などは、大きいとは申されませぬ。新左奴のは斯うでござりまする。」

天と地を團子に丸め手にのせて

ぐつと飲めどものどにさはらす

とは如何でござりませう。」

成るほど、これより大きいものはあるまいと、秀吉初め一同感心した。

「然らば、今度は最も小さいものを致せ。」

聲の下から進み出たのは細川幽齋であつた。

罌粟粒の中くりぬいて家建て

離れ座敷で學問をする

と詠めば、里村紹巴は負けじと、

蚊の流す涙の中の荒海で



船を集めて地引ひくなり

とやると、何のそのとばかりに新左衛門が、

蟻の子が流す涙の中島で

砂子ひろうて千々に砕かん

と詠んだので、これまた一同の感心する所となつた。

新左衛門は面目を施して、起たうとするとき、何うした機みであつたか、ブツと放屁をした。これには列座の諸侯も、如何に出物腫物は處嫌はずとは言へ、何うなる事かと秀吉の頭をそつと見ると、勿論秀吉の顔の色はサツと變つた。

「待てッ、新左……。」「はッ。」

新左はそれへ平伏した。秀吉は持つて居た中啓で、平伏して居る新左の頭を了と

打つた。新左衛門やをら面を上げて、

太閣の御前で國を儲けけり

頭はりま(播摩)に尻はびつちう(備中)

とやつたので、不興氣な顔をして居た秀吉も、思はず噴笑した。其の後播摩と備中  
にかけ合ふほどの祿を新左衛門に與へた。

また或る時であつた。新左衛門は慌だしく、

「殿下、殿下、珍らしいものを御覽に入れますから、早く御物見にお上り遊ばせ」  
「何ちや慌だしい。珍らしいものとは。」「外でもござりませぬが、きうりがきうり  
を食して居ります。」「馬鹿な事を申せ。胡瓜が胡瓜を食ふなどと。」「それが事實で  
ござりまする故、お珍らしいのでござりまする。」「

秀吉もそは珍らしと、物見にあがつた。

「何れぢや。」「彼處でござりまする。きうりが胡瓜を食して居りまする。」

新左衛門が指した方を見ると、薪を背負ふた一人の老爺が、とある石段に腰打ちかけて、生の胡瓜を嚙つて居るのだつた。

「あれか。」「御意にござりまする。」「あれは薪を背負ふた百姓ではないか。」「薪を背負ふた木賣でござりまする。」「あッ、新左、予を擔ぎ居つたの、はムムム成程、木買が胡瓜か。」

秀吉も一杯喰いされながら大笑ひ。其の後であつた。

「殿下、お珍らしいものを御覽に入れまする。早くお物見にお上り遊ばせ。」「新左、また木賣が胡瓜の傳か。」「否え、今度こそはお珍らしいものでござりまする。他で

もござりをせぬが、犬が碁を圍むで居ります。」「何と申す。四脚が碁を圍んで居ると申すか。左様な馬鹿な事があるものではない。」「處が、それでござりまするから不思議ではござりませぬか。」

秀吉はまた物見へあがつて見廻したが、何處にも見當らぬ。

「新左、何れぢや。」「あれでござりまする。」と新左衛門が指す方を見ると、それは犬が交尾して居るのだつた。

「新左、あれは犬が交尾して居るのではないか。」「白が一目押して居りませう。」

「は……、矢張り木賣が胡瓜の傳であつたの。」と言つて笑つては見たものゝ、度々擔がれて見ると、何處やら腹も立つ。

「新左。」「はッ。」「どうも其方は予に偽はりを申して不可ぬ。以來嘘は嚴禁いたす

ぞ。よいか、嘘を封じるぞ。」「はッ……。」  
嘘を封ぜられて以来、新左衛門は秀吉の前へ出て何を話しても一向面白くない。

ある時秀吉は、  
「新左、どうも其の方近頃面白い話の種切れと見えるの。どうぢや何か面白い話でも致せ。」「はッ、恐れ入ります。面白きお話を申し上げようと存じましても、嘘を封ぜられました拙者、世の中の事は何事でも、嘘偽はりがなうては面白うございせん。戦争の計略、出家の方便、商人の懸引、一つとして嘘が交らぬものはございませぬ。嘘が混らねば、話も面白いものではござりませぬ。」「なるほど、然らば只今限り、封じて居た嘘は許すであらう。」「はッ、有り難き仕合せに存じまする。」  
斯くして新左衛門の嘘は天下御免となつた。

#### 四 猿の面が秀吉の面に酷似

秀吉は將に微行しようとした。近臣は切に之を諫めたが、秀吉は聽かなかつた。これは曾呂利に謀るの外はないと、新左衛門に何とかして公の御微行を止め給ふやうに御諫め申上げ貰ひたいと頼んだ。新左衛門は譯もなくそれを引き受け、早速秀吉の面前へ出た。

「うむ、新左か……。」

新左衛門は返事をしようとしたが、只だ略々と咳嗽ばかりして、言葉も頓には出ぬ風であつた。秀吉は怪しみ、

「新左、如何致せしぞ。」と問ふた。

「はッ……實は拙者怪物を食しましたる處、それに中られて苦しくて堪りませぬの

で、嘔かうと存じまするが、なか／＼思ふ様にまゐりません。」「何ぢや、怪物を食したと申すが。」「御意に忝りまする。曾て私は北山に遊びましたが、其の時一匹の怪物に逢ひました。其の姿はと申しますれば、身の丈は一丈餘、形は人間の様でございますが、翼を蓄え、鼻さの高さ驚ろくばかり、正しく世に言ひ傳へ、または繪などで見ると天狗と少しも異りません。其の天狗は拙者をいきなり攫ま殺さうとしました。拙者は何とかして脱れようと思ひましたが、とても力が敵ひませんので逃げられもせず、然るに一計を案じまして、聞く處によれば、天狗には飛術があるといふ事、冥途の土産に見て置きたいものぢやと申しますと、天狗の言ふには、よし／＼、お前の望みに任せて見せてやらうと、自分は如何なる姿にも變ずる事が出来ると申しますによつて、然らば其の大きい身軀をして、一番小さな姿になつた處を見せて

呉れと頼みますと、忽ち今迄の丈餘の姿は消えまして、拙者の掌にひよいと飛び乗つたのは、蟻にも等しいものでござりました。依て拙者はそれを一口に呑んで立ち歸りましたが、天狗は神獸でござりまするが、一度其の威を失へば、拙者如き者の食とはなりまする。」と物語つた。秀吉は莞爾と笑ひ、

「は／＼／＼家臣共が其方に頼み居つたな。可しく、安心致せ、微行は思ひ止まるであらう。」と言つた。

或る時、近侍を顧みた秀吉は、

「諸大名は、私かに予の面を猿に肖て居るとて、猿面々と申して居るといふ事ぢやが、眞實か、決して立腹は致さぬ。有體に申せ。」

流石、近侍のものも恐縮した。秀吉は重ねて言つた。

「何故黙つて居るのぢや。」「恐れ乍ら、仰せの通りでござりまする。」  
 恐る々々近侍の一人は言つた。

「うむ。正則も、幽齋も申して居つたであらうの。」

近侍のものは、常に新左のためにやり込められて居るので、今日は幸ひ、一番殿下に油を絞らして遣らうと云ふので、

「御意に忝りまする。諸侯方も諸侯方でござりますが、それに控へて居りまする新左衛門殿も申して居られました。」「何と申す、新左奴もか。こりや新左、其方も予の顔が猿に肖て居ると申したか。」「どう仕りまして、決して左様な事は申しません。不肖新左衛門の見奉るところにては、殿下のお面が猿に肖て居るなどは、まつたく往くと歸るとの相違かと心得まする。殿下のお面は決して猿に肖ては居り

ません。」「新左奴、己れの蔭口を蔽はんがため、左様の世辭を言ふても駄目じやぞ。」「決して世辭などは申し上げません。」「世辭でないといふが。うむ、近頃以て忝けない事じや。では新左、予の面が猿に肖て居るのに、何故左様の事を申すであらうの。」「さればでござりまする。それは殿下のお面を拜するものゝ間違ひで、殿下の御面が猿に肖て居るのでなくて、猿の面が殿下に酷似でござりまする。」

今迄莞爾にして居た秀吉の面はサツと不興氣に變つた。

「何と申す。猿の面が予の頭に肖て居ると申すか。無禮者奴がッ。」と言つて、スツクと起つて一定に入つた。近侍のものは面を見合して恐縮して居たが、新左衛門は下唇をへこ／＼嘗めて、平氣な顔をして居つた。

五 難句と將棋の必勝法

喬木は風に見舞はれることもまた激しいもの、新左衛門が秀吉に寵愛されるのを見て、近侍のものや其の他の間に於て、頻りに之れを羨やみ、果ては猜み出した。或る年の月見の宵の事であつた。これ等のものが溜に寄つて、何とかして折を見出し、新左衛門の鼻の孔を開かしてやろうではないかといふ相談をして居た。其處へ折よくやつて来たのは新左衛門であつた。一同は面を見合して居たが、中の一人が、

「曾呂利氏、毎日御苦勞に存する。就ては今日は余の日でもござらねば、一つ吾々のために、名月の俳句を吟んで見ては下さるまいか。尤も貴殿の事でござるから、これまで吟まれたものも多くあるに違ひないが、さういふはらみ句では面白くないによつて、何卒御即吟を承はりたいもので……。」

新左衛門は元が鞍師、俳句の道までも知りはずまい。これで一番恥を掻かしてやらうといふ魂膽であつたのだ。

「承知いたしました。拙者元は町人ではござれど、新規を好んで仕入れといふ事が大の嫌いでござつて、俳句などでも御注文によつて、いくらでも早速しつらへますから、どしどし御注文に預りたい。」と言いながら、懐紙にスラ〜と書いて差し出した。取り上げて見ると、

はらみ句や三五夜中の子持月

とあつたので、遠かに一同も二の句が次けなかつた。と、また中の一人が、

「早速の御名吟には恐れ入りました。それでは今度は、世の中で最も直ぐなるものを狂歌の中に吟み込んでいただきたい。」「宜しい。」

新左衛門は別に考へる風もなく、またスラスラと認めた。

「如何でござる。まだ直ぐなものがござらうか。」

木には杉園のくれ竹槍の柄に

人では乞食これ直ぐなもの

一同成る程と、初めは恥かしめるつもりであつたものが、今度は頻りを感じし出した。すると又一人が、

「遣がは曾呂利氏、感服の外はござりませぬ。ついては、世の中に士農工商と云ふ、それぞれの階級がござるが、士と申したところで、別に神でもあるまいし、また商工と申したところで、畜類でもござらぬが、どういふ譯でかういふ階級をつけたものでござらう。一つ其の譯を聞かして頂きたうござる。」これはまた異なお訊ね。

狂歌道の事でござれば、新左奴及ばすながら存じて居りまするが、左様な難かしきことは、一向に存じ申さぬ。「いや、これは拙者の申し様が悪かつた。これを狂歌で聞かして頂きたいといふのでござつた……。」「畏まりました。而し農工商の階級と申すと恐れ多ふございますが、これを器具に例へて申すことに致しませう。」それは何れでも結構でござる。」

新左衛門は筆を執つた。既に前から出来てでも居たものゝ様に、早速料紙に筆を走らせた。

行燈も提灯もはた暗の夜に

火さへともせば同じあかるさ

と認めた。これを見た一同は、益々感服し、でこれでは上の御氣に入るのも無理は

ないと、以後は新左衛門に敬服するやうになつた。

其の頃、將棋が非常に流行して、大名間に於ては態々將棋の師匠を招いて稽古をするといふ風じあつた。或る時利休が秀吉に向いて、

「恐れながら殿下には、日ごろより圍碁をお好み遊ばされますが、近頃流行致して居りまする、將棋のお慰みを遊ばされましては如何でござりまする。」うむ。予は將棋なるものを更らに辨まへぬが、一度見る時は、其の方共には劣らぬぞ。」

如何に殿下でも、一目見たばかりで、其方共に負けぬなどは、よいく、今日こそは一つ殿下をやり込めてやらうと腹の内と思つた。

「然らば上様、當時名人の稱ある大橋宗桂をお招き遊ばされては如何でござりまする。」うむ。早速招け。」とあつたので、直ちに宗桂の許へ使者は走つた。宗桂は秀

吉の召しとあつて、取るものも取り敢へず伺候した。そして秀吉の面前で、利息と駒を鬪はしたが、とても利休などの及ぶ所ではない。一手合せを見て居た秀吉は、「うむ。予は既に會得いたしたぞよ。新左、其方はどうぢや。」と、傍もの新左を顧みた。

「左様でござりまする。恐れながら居眼りを教して居りました爲に、頓と判りませんでしたが、將旗にはどうすれば勝つ位の事は、何でも無い事でござりまする。失禮ながら必勝法を御傳授申上げませう。」

新左衛門は、何やら秀吉の耳に囁いた。

「うむ。成る程、左様か……これ宗桂とやら、一手相手をいたせ。」はつ、有り難きは合せに存じます。」宗桂、參れ、ぢやが待てよ。予は從一位關白であるぞ。」



「御意にござりまする。」「其方は無位無官、高の知れた將旗指しであるぞ。」「恐れ入りまする。」「其の無位無冠の其方が、予の相手を致すとあれば、對局はならぬぞ、依て何なりとも駒を下せ。」「畏まりました。何れの駒なりとも、殿下思召の駒を下し遊ばせ。」「其方も日本一の將旗指しであるから、なか／＼以て大駒は下せぬ。是れを一枚下して遣はずぞ。」「はつ。」「予は飛車の頭の歩をとつて遣はず。好いか、下した方が先手といふのは法でないぞ。」

日本一とも言はれる自分、それに新左衛門が如何なる事を教へたか知れぬか、例へ歩でも下してかゝるとは生意氣千萬と思つてゐると、秀吉は飛車の頭の歩を下して、直ぐに飛車か角の頭の歩をとつて成り込んで了つたので、角は忍ち死んで、まつたく手のつけ様がなくなつて、追かに日本一と稱された宗桂も、脆くも敗をとつ

た。

「どらぢや。」と秀吉の鼻も高かつたが、新左衛門も、

「殿下、如何でござりまする。」と、低い鼻を蠢めかした。

「新左、其方の助言によつて、予は日本一の將旗指を打ち負したぞよは／＼／＼。」宗桂の方では、

「憎い新左衛門奴。」と、瞬きもせず新左衛門の方を睨んで居たが、どうも致し方がない。新左衛門が人を茶北したやうな顔をして、ペロ／＼舌を出して下唇を舐めて居るのが、癪でならなかつた。

#### 六 一文倍増し

或時新左衛門は、得意の狂歌を吟んで、秀吉の御意に叶ひ、何なりとも望めとあ

つたので、

「然らば上様、遠慮なく申上げますが、一文の金子を元金にいたしましたして、此の御縁側にあります障子のこまの數に準じ、倍増しの勘定を以てお下け致し下されたう存じまする。」うむ。流石は根が町人の其方、金子でよいと申すか。ぢやが新左、障子のこまがいかにほど有つても、一文金では知れたものぢや。もつと大きく望んではどうぢや。」どう仕りまして、一文宛で結構でござりまする。」左様か、然らば早速下け渡すであらう。」と、直ちに此の事を勘定方に命じた。

其の間は諸大名伺候の間であるから仲々廣かつた。疊數は二十疊で、十五間の四十間で六百坪、その四十間に一間半の障子が二十六枚、それに一間の床側、一間半の障子のこまは、横に六つ、縦に十であるから、即ち一枚に就て六十こま、二十枚

の總數は一千五百六十こま、これによつて一文倍増しに勘定を始めた。

「一文、二文、四文、八文、十八文、三十二文、六十四文、百二十八文……。」といふ風に、金額はどんどん増して行つた。初めは僅かに一文であつたが、二十こままで讀んでゆくと、其の高は實に十二萬九千八百七十二文といふ素晴らしい額に達した。此の調子で行くと、二十枚は愚かなこと、一枚の障子丈けでも大變な金額になるので、勘定方も驚いて、免も角もと秀吉の前に伺候した。

「はつ、申上げます。」うむ。大儀であつた。新左に取らしたか。「否え、まだなかく左様な運びには至りませぬ。それにつきましてお目通りを願ひました様な次第でござりまする。」は、は、は、は、大きく望めと申せしにも拘はらず、僅か一文位望んで、扱て勘定して見ると其の額が少ないので、何か新左が不服を申し出たと見え

るの。「なか／＼もちまして、それならば宜しうござりますが、賣は只今二十こ  
 ままで一文倍増しに勘定致して見ますると、十二萬九千八百七十二文といふ、法外  
 もない額に上りました。此の具合で勘定致して参りますれば、一枚の御障子丈けで  
 も大變な額となりました。到底お手許金のみでは不足を告げる様な事になります  
 が、如何致しませうや、一應御伺ひ申上げます。「左様な大金にならう筈がない。  
 初めの元が知れて居る。初めは一文であるぞ。それは勘定違ひであらう。「御意の  
 如く、初めは一文でござりますが、計算いたしますれば、相違なく只今の額  
 に／＼るのでござりまする。「ふむ。それは意外ぢや。これ新左。「はッ……。「予  
 は考へ違ひを致して居つた。何か他のものを望め。「これは上様のお言葉とも覺え  
 ませぬ。下々町人百姓の卑しき者すら、一旦約束の致しましたことは破りませ

ぬ。それに上は天下の關白職、從一位に渡らせられまする。お約束をお破り遊ばす  
 やうでは、上を倣ふ下とやら、下々までが左のことを見倣ふ様になりますれば、こ  
 れだけはお約束通りにお守り下さらねば困りまする。「うむ。然らば全然與へぬ譯  
 にも参らぬにより、一枚分だけ下け渡すであらう。「ではあとの二十五枚分だけは、  
 恐れながら上様にお貸し申して置きまする。「否や／＼借りぬぞ。残り二十五枚は  
 止めぢや。一枚分とあれば千兩もあれば結構であらう。「致し方がござりませぬ。  
 ちよつとお待ち下され、エート、不可ませぬ／＼、上様、二十三こままで百三萬  
 八千九百七十六文となります。一枚のお障子のこまは六十こまでござりまする故、  
 千兩では不足を告げまする。「何と申す。千兩あつても一枚分にも足りぬと申すか。  
 さて／＼新左、其方は又しても予に一杯食はし居つたの。千兩で負けて置け。「上

様の御言葉、致し方がござりませぬ。「酷ひ奴ぢや。何か浮ばぬか。」只今申上げ様と存じて居りました。

時ならぬ時に暑さは来りけり

二十五枚の樟子外して

とは如何でござりませう。「は……詠み居つた。」

秀吉も思はず苦笑を洩らした。それはあたかも極寒の頃であつた。

七 あしを取り去る

或る年の正月二日の事であつた。此日は數多の大小名が、綺羅を飾つて年始祝詞を申述べるために出仕すると、秀吉はそれ／＼大小名に對して酒肴を下されるのが例だつた。年始の祝詞も濟んで、それぞれ大小名の前には、結構な膳部が運ばれた。

そして一番最後に、凡そ一坪もあらうといふ様な大島臺を、近侍の者數人がかりで運んで來た。其の大島臺には、嘉例によつて緑色濃き若松を立て、四方にはから栗、錫、其の他の目出度いものを飾つてあつた。近侍の者は、今しもそれを中央に置かうとしたが、其のうちの一人がどうした機みか、足を這らしてよろ／＼としたので、それにつれて他のものもよろめいた。拍子に持つて居た手を放したので、何條以て堪るべき、件の大島臺はドシンと落ちた。それが落ちたのみならまだよかつたが、一同がその上へ倒れかゝつたので、其の重みで大島臺の四つ脚はメリ／＼と折れて了つて。

かねて指續強い秀吉の面前、而、るか、近侍の者は勿論の事、居

の吉例の日の此の粗忽、雨となるか風とな小名も呀と思つて居ると、案に違はず今迄

上機嫌であつた秀吉の面には、  
しらうとする時、ズイと進み出

「ははッ……上様お目出度う存

秀吉の聲は勿論怒氣を含んで

「今年は例年に比し、殊にお目

まして、お祝ひ申し上げます

日ぢや。その嘉例、席上に於て

大不吉ぢや。何が目出度い。退れッ。」

ぬ。島臺の脚の折つたからとて、決して不吉ではござりませぬ。本日は左様なるお

言葉はお控へ遊ばすこそ然るべくと存じます。不吉どころではござりませぬ。な

そゝいだ。迅雷一喝、まさに口から逆

衛門であつた。

何を、何で目出たいと申すのぢや。」

ひする。恐れ乍ら新左衛門、一同に代り

六な事を申す。今日は年の始めを祝ふ吉

島臺の四脚を折るなどとは不吉も不吉

殿下のお言葉とも覺えませ

不吉どころではござりませぬ。な

か／＼以てお目出度い事と存じます。失禮ながら、これを御覽下さるやう。」と、  
懐紙を取り出し、矢立の筆を抜きとつて、サラ／＼と認めて差し出したのを、不興  
氣に取り上げた秀吉が見ると、

あしといふことは残らずとりすて、

年のはじめを祝ふ目出たさ

とあつたので、忽い秀吉の顔色も和らぎ、微笑さへも浮んだ。

「うむ。如何にも新左目出たいのう。」御意にござりまする。斯様に目出たい事は

ござりませぬ。「うむ。目出たい／＼、一同のもの喜んで呉れ。本年は悪しといふ

事は悉く去つたぞよ。」と、却つて以前にも増して上機嫌となつたので、今まで如何

なる事かと、蒼くなつて打ち振ふて居た近侍のものは、はじめてホッと息を吐き、

安堵の胸を撫でおろして、何れも心のうちでは、新左を生命の恩人と拜んで居つた。

秀吉は新左衛門の一首によつて、機嫌上々、當日は大小名をはじめ、此の粗忽をした近侍のものにまで、それぞれ恩賞を與へるなど、例年にない事であつた。

八 極樂世界我れに賜はれ

滑稽洒脱、浮世の風は何處を吹くやらといふ様な新左衛門も、不時に襲ひ來る病氣には敵はなかつた。僅かな病氣が固となつて、日に日に重つて行つた。秀吉は殆んど毎日の如く之れを見舞はしめた。と、或る日の事、秀吉の許に新左衛門は一通の書面を差し出した。

御 伺 書

微臣、松本新左衛門事會呂利新左衛門儀此世の中に滞在中は一方ならぬ御寵遇に預り、私一身の榮譽のみならず一家の光榮子孫の名譽是れに不過難有謹むで御禮申上候然るところ此度私儀の風聞冥府へ相聞え候ものか同地より屢々參れとの御下命に接し如何に御辭退申上候ても聞き入れられず此度止む無く同地へ旅立つ事に相成候就ては上様同地御在住の御祖父は其他の方々様に御用も御座候はゞ何卒御斟酌なく御申付け下され度如何様の儀に候とも必ず御届け申す可く候もつとも同地に參り候ても同地より此世には御梗り致兼候間御用向の儀も具て片便りと思召下され度此段御 伺 申上候 謹白  
と記してあつたのを見た秀吉、

「はゝゝゝゝ香氣な奴ぢや。自分の一命が旦夕に迫つて居るに、斯様の戯れ事を認

め送るとは、これく、誰そある、新左の許に参つて、其方の書面はたしかに見た。いづれ托すべき事は考へて置くであらうと傳へよ。」はつ、畏まりました。」

秀吉の使者は新左衛門の住居へ走つた。そして其の枕許で此の旨を傳へた。

新左衛門の病はいよ／＼篤くなつた。それと聞い、秀吉は、自ら供を隨へ、新左衛門を見舞ふた。新左衛門は涙を流して、其の忝じけなさを感謝した。

「新左、臨終に望んで、何ぞ望みがあつたら遠慮なく申せ。」有り難き仕合せに存じ奉ります。」

彼は家人に命じて筆と料紙を取り寄せ、床の中で、

御威光で三千世界手に入らば

極樂浄土我れにたまはれ

と認めて差し出した。

「うむ。此の重態にあつても其方の此の戯れ歌、天晴れであるぞ。」と賞しながら、

秀吉は館に歸つたが、これ程の重態にあつた新左衛門も、まだ壽命があつたものか、今度は日に増し快方に赴いて、やがてすつかり全快したので、御禮として秀吉の御前に伺候した。秀吉は新左衛門の姿を見て、

「新左、冥府よりの迎へをよく断はつて参つたのう。」「數ならぬ拙者奴を、いろいろと御配慮下されまして、忝いな存じます。實は上様斯様でござりまする。」と彼は懐紙に狂歌を認めて出したが、それはかうであつた。

冥途よりも此の世の上様戀しうて

しんだ左衛門生きてまた

「うい奴ちや」と、秀吉の機嫌も斜めならず。益々新左衛門を寵愛したが、秀吉は其の偉業たる朝鮮征伐も、惜しや半途にして慶長三年に薨去した。其の後は新左衛門、再び塚に戻つて、剃髪して宗祐と改め、秀吉の菩提や、父祖の菩提を懇ろに弔つてゐたが、越えて慶長八年九月二十二日、年五十八歳を以て往生を遂げた。

乞食桃水

一 遊び道具は佛像

僧桃水は筑後の人で、諱を雲關と云つた。其の父母は凝り固まつた浄土宗の信者で、商を以て業として居た。

「佛壇の香華のころにかけて常に絶やさず。」と傳贊に記してあるところを見ると兩親の敬虔なる信仰が窺はれる。

桃水は斯ういふ宗教的氛圍氣の豊かな家庭で育てられた。母は異夢を見て彼れを妊むたと云ふが、それは假し後人の附加した事であつたにせよ、己れに授けられた子は、即ち佛の慈惠であると感謝するのは至當である。



桃水は子供の時分から、其の遊び道具は佛像であつた。傳贊に「嬰兒の時より佛像を好みて別の道具なし。」とある。

或る日の事であつた。桃水は佛像を抱へて表へ出た。すると母親は非常に驚いて、

「これく、佛像を玩具にするといふことがありませんかえ、勿體ない。罰があたりますぞ。さあ、母さんにおかへしなさい。その代りにお錢をあけるから……ほら、此の通り。」と言つて、幾千かの金を握らせた。すると桃水は首を據りながら、「母さん、坊は錢よりも佛像の方が好きだ。」と答へて、母親が握らせた金を大地へ投げつけて、其のまま表へ出た。

父母が佛壇の前に禮拜して、念佛稱名をすれば、桃水はさうする事が、何のた

めかも判らないが、同じ様に手を合せて、念佛稱名するのが常だつた。こんな風に、幼ない時代から他の子供とは大いに異つて居つた。そして兩親も、

「此の子はとても商家には不向きぢや、寧ろその事に出家さしてやらう。」と、桃水が七歳の時に、彼を肥前圓應寺の曹洞宗(禪宗)園巖宗鐵和尚といふ名僧の許に托して剃髪させた。

園巖宗鐵和尚は、肥後熊本壺井の流養院第二世で、永平門下十八世の法孫で世に聞えた有徳の高僧であつた。和尚一代に僅かに十人の弟子しかなかつた。其の弟子といふのは、即ち、船岩、在天、勝雲、桃水、然實、賢仲、壁山、雲歩、慧中、大用といふものであつた。桃水は其のうちでも傑出した一人であつたが、和尚が其の弟子に對して如何に深切であつたか、如何に指導が綿密であつたかを思ふと、涙が

出るほどである。「禪師常に一人を得度するごとに某弟子壽命長延辨道増進の爲とて、日々、蓮經一部を讀して三寶龍天に回向す。幾千部といふこと計ることなし。」と、師の此の熱心な思ひが、遂ひに十人の弟子を發奮向上せしめたのは、疑ふべからざる事實である。

## 二 葵の花問答

幼ない時から穎敏であつた桃水は、寺院に入つて佛道を修める様になつてから、殊に衆に優れて來た。

彼が寺に入つてから六年目、恰かも十三歳の時であつた。一日葵の花を持つて樹の上に立つて居ると、其處へさる檀家の一人が來かかつた。檀家は日頃桃水の穎敏なを知つて居たので、一策を考へて試さうとした。

「桃水さん、何の花だね、お前の持つてゐるのは？」と聞いた。桃水は、

「是れですか、これは葵の花ですよ。」と答へた。

「葵？ 葵ならなぜ花が紅いんだね？」檀家はまたかう聞いた。そして如何に桃水が伶俐でも、一言もあるまいと思つてゐると、その位の事に凹まされる様な桃水ではなかつた。

「橋だといふに、なぜ貴方は中央を通るのです。」と、此の當意即妙の一言に、遺がの檀家も二の句が次けず、其のまゝ苦笑して行つてしまつた。

桃水は少年時代から青年時代へかけて、聖道門特有の難行苦行を實行した。それは「十五六歳の時から、他の教ゆる者なきに、自分の料簡にて種々の事を勤めてみる、或は三日斷食し、或は一夜中庭園に立明して經典を讀み、或は深山に獨り籠

り二夜も三夜も歸寺せられず。或時は大河の潭の一角に晝夜となしに坐禪靜觀せらる。この事幾度と言ふこと無し。見聞ともに兎に角世人と變りたる小僧よと噂せられ、爲に師匠の圍巖禪師も何んらの説諭もなく、ただ風韻漢とばかり呼ばれしとぞ。」とあるを見ても知る事が出来る

### 三 然ゆるが如き求道心

一日師匠は、弟子一同を招んで教化して曰く、

「わしはお前たちに言ふて置くが、五色のうちでも色と食と眠の三慾は出家の身としては離れ易いが、利と名との二慾は實にむつかしい、お前たちが知つてゐる道元禪師も「菩提心を發すといふのは、己れ未が度らざる前に一切衆生を度さんと發願し誓むなり。」と宣べられて居る。人間といふものは、年をとればとる程、又世の尊

敬を受ければ受けるほど、名と利とが色々の理由を附けて來るものぢや。喃知見解會は各々の修業次第ぢやが、この三慾だけは確と心に繋いで置いて貰ひたいものぢや。」と、委曲丁寧に誡めた。

此の時他の弟子達は、頸を垂れて默然として居たが、獨り桃水のみは、

「さしても無き事を、ひどく難題のやうに教化せらるゝものかな。」と呟いた。彼は決して傲慢な心で斯く呟いたものではなかつた。

「そんな事は、私にとつてはもう問題ではない。」と言ひ得るほど、それほど修業を積んで居たのだつた。當時彼は二十歳の若年ではあつたが、既に人生の打ち克ち難い五慾を克ち得る確信を有つて居つた。

これまでならばいざ知らず、今後の彼としては、圍巖和尚を師として、辨道工夫

するには、餘りに器が小さかつた。物足りなくなつた。向上奮闘の英氣に溢るゝ彼は、最早や此の田舎寺に燻ぶつて居られなくなつた。

「我はやがて衆生の導師を以て任ずる。」と言ふ莊嚴聖崇なる自覺が、彼の胸底に閃めいた。そしてそれは絶えず往來して居つた。彼は其の燃ゆるが如き求道心を抑へる事が出来なくなつて、斷然志を決して、肥前を跡に關東へ志した。

道中諸所の禪道場に編參して、漸く江戸に着いたが、當時と異つて、其の頃肥前から江戸までの道中と云へば、口でこそ何でもないが、事實は決して容易な事ではなかつた。

江戸に着いた彼は、一先づ駒込の吉祥寺に足を留めたか、當時佛敎界は腐敗の絶頂にあつた。禪風も亦萎微してゐたのには、尠からず彼の憧れを覺ました。其の頃

吉祥寺と云へば、江戸に於ける洞門の道場としては有名な道場であつたが、彼は斯の道場にも己れの針鍵を受くるに足るほどの師を見出す事は出来なかつたのである。僅かの間で吉祥寺を出て、今度は下谷の某寺に假寓した。

一日桃水は、何氣なく菜園に出て見だが吃驚した。それは外でもない、菜園の周圍の塀が、残らず卒塔婆で造つてあつたのだつた。それが古いのならばまだしも、やつと此の頃墓地に埋めたりしいやうな新しいのが幾本となく其の中に交つて居つた。そして作男が畑に肥料を撒く時は、其の飛沫がその卒塔婆にかかる。それを見た桃水は忍びなかつた。彼は住職の無道心を情けなく思はずには居られなかつた。さうしてこれを面と向つて忠告をするよりも、それとなく悟らして與らうと考へたので、毎日彼は市中を托鉢に歩いた。そして幾らかの淨財が出来ると、それ

で板を求めて来て、垣根にされてあつた卒塔婆を其の板の廣さだけづゝ抜き取つて、まとめて置いては隅田川に持つて行つて水に流した。

或日住職が菜園に出て見ると、殆んど大部分の卒塔婆がなくなつて、其の代りに立派な板塀に變つてゐたので、不思議な事に思つて、厨房で働らいてゐた一人の僧を捉へてどうしたのかと聞いて見た。

「あれでございますか。あれは近頃來てるる、雲水僧の桃水殿が、市中へ托鉢に歩かれて、貰つたお錢で板を買ふて來て、塔婆の代りに立てられ、今までの塔婆は、態々隅田川に持つて行つてお流しになりました。」と答へた。これを聞いて住職は、大いに感ずると共に、これ迄自分が無道心であつた事を恥ぢて、早速残つてゐる塔婆を抜いて川に流させ、代りに全部板で以て圍はしめた。此の事がそれからそれと

知れて、下谷淺草にある曹派宗の寺には、一木も塔婆の垣根が見えなくなつたといふ。

#### 四 研鉢で麥搗き

江戸の宗教界に憧がれて、遙に肥前から來た桃水も、然ゆるが如き彼の求道心に對して、一人として満足な師家を見出す事が出来なかつた。處が聞くと見るとは反對で、當時の僧侶の墮落した生活には嘔吐を催ふさざるを得なかつた。故に間もなく江戸を辭して一蓋の笠、一本の杖、身を雲水に任せ、再び諸國に師を探し求めた。苟くも善智識の名ある門は、如何なる僻地と雖も行いて叩いた。有名な澤庵和尚（今の品川東海寺）の門を叩いて、其の數へを乞ふた事もあつた。或は長崎に到り隠元禪師にも推參した。斯うして彼れは、自家獨特の境涯へと日一日と進み入つ

た。

彼は諸國を編參して、山城宇治の萬福寺に掛錫した。「宇治の黄蘗山に寓在すること七八年す」と傳贊にある處を見ると、餘程黄蘗宗に共鳴して居たと見える。

桃水は純曹洞系の出身であつたが、それが師を黄蘗宗に求めたといふのは、當時曹洞宗には彼をして満足せしめるほどの傑僧がなかつたのである。

桃水が宇治の黄蘗山に在中、彼が得度を受けた師の圍巖宗鐵和尚が、郷里肥後の流長院に住することを聞いて、彼は久々振りの歸省旁々戻つた。さうして舊師に十年あまりの間を奉順した。そして明曆三年七月十一日に彼は師の圍巖宗鐵和尚から、佛祖正傳の大法を嗣いだ。其の翌年能州總持に出世して了つて、肥後の南郷といふ處の清水寺に一時寓在することとなつた。

一日彼は、かねて知己の間柄の、高林と大用とか熊本から十餘里の道程を遠しともせず、清水寺に桃水を訪問した。時あたかも夕暮れであつたが、彼は兩人の訪問を非常に喜んで、

「各々は遠路を遙々と來られた事であれば、何はさて置き空腹でムらう。先づ夕食の支度をするゆゑ、どうぞ次ぎの間にてゆる〜とお休みなされ。」と言ひ捨て、研鉢を取り出し、搗木で一生懸命にコツ〜と音をたてゝ居た。處が幾ら待つても夕食は兩人の前に運ばれさうもなかつた。既に四ツ時今になつた。(晩今の午後八時頃)兩人は空腹を抱へなから待てど暮せど一向桃水は出て來ない。一體桃水は我々のために、何を拵らへるのやと、大用は不審に思つて、そつと節穴から覗いて見ると、桃水は褌かけで、セッセと搗木で研鉢を攪き交せて居た。

「桃水どのには、一體何をおつくりなさる。」と聞いて見た。

「齋米が切れて、村は遠し、夜中ではあるし、「どうも仕様がなないので、此の間托鉢して貰つて来た大麥を搗いて、之を麥飯にして各々に振舞ふと思ふのだから、どうも氣は急いでも埒があかなくて困つてゐるところぢや。」と答へた。

これを聞いた兩人は呆れて顔を見合せた。そして、

「桃水どの、お廢しなされ。今頃から麥を搗きはじめてとて、到底今夜の間に合はさうもござりませぬ。夕食などはどうでも可いとして、お話でも承はることに致しませう。」と言つて止めたので、桃水も麥搗きを止めたが、其の夜は夕食も喰はずに話し明かした。兩人はそれでも非常に悦んだ。

##### 五 有體に告白

桃水の師匠、團藏宗鐵和尚が流養院に退いた後へは、三代目として、桃水のためには法兄の船岩和尚が坐つた。

一日船岩和尚が、その頃有名な鐵眼彈師を講じて法華經の開講をした。その時桃水も招かれて參聽に出かけたが、當日は大勢の參詣人が堂に溢れて居た。桃水も其の中に交つて聽講して居たが、ふと書院の前の菜園を眺めた時、何と思つたのか早速破れた着物を着て、素足で糞桶を荷ひながら、菜園の茄子に糞を撒いた。風は書院の方へ其の猛烈な臭いを吹き送る。

「これは堪らぬ。」いや、臭い〜。」と、一同鼻をつまむで眉を擧める。船岩和尚はこれを見て、

「桃水どの、お廢しなされ、沙門として其の様な汚ない業をするものではござら

ぬ。」と、呵責する様に言つたが、桃水は、

「はッくく、船岩どの、それは近頃異な事を承はる。して見ると雪隠へ入つても、尻も拭ふことはなりません。人間は尻を拭ふた手で、佛へ合掌するけれども佛は汚ないと言はれた例も聞かぬ。菜園の糞位はそれはど穢いものではござらぬ。今のうちに肥料を與らぬと、茄子が瘦せて了ふ。」と笑ひながら答へた。此の問答に多くの参詣人の中には、只だ面白く聽いて笑ふものもあつたが、桃水の言葉に感心したものが多かつた。

大阪に法巖寺といふ可なり大きな曹洞宗の禪寺があつた。賊難、火難と度々打ちつゞくので、誰も住持とならうと云ふものがなかつた。それがために殆んど無住同様になつてゐるが、檀家のものも、さういふ何時までも無住で打ち棄て、置かれな

いので、寄々協議をしてゐるが、其の檀家のうちに、桃水和尚を知つて居るものがあつて、他の檀家とも相談をなして是非來て貰ひたいと桃水に交渉した。

桃水和尚強いてといふので承諾をした。そして其の寺の住持となつたが、謹嚴な禪僧であつた處の桃水は、法巖寺に入つてから、そろ／＼酒脱氣を帯びて來た。

桃水が法巖寺に入つてから、二年ばかり住持をしてゐるうちに、面白い事件があつた。それは熊本の上士で、彼の知人に某といふものがあつたが、可成りの祿も喰んでゐたもので、所存があつて浪人して、一家郎黨を伴ふて大阪に來たが、恰好な家が見つからないので、法巖寺に桃水和尚を訪ねた。そして暫らく寺に置いて貰ひたいと頼んだ。

「よく訪ねて下された。幾日でも御自由に御滞在なさるやう。」と快く承諾した。武



士は喜んだ。早速一行二十餘人法巖寺へやつて来た。桃水和尚はそれ等の人達を歡待したが、皆な大阪が珍らしいので、毎日のやうに見物やら參詣やらで曝き廻つた。處が不幸にも此の事を町の目付役が不審だと思つてか、町奉行所へ届け出した。

「法巖寺並に大阪曹洞宗一派は、明日町奉行所へ出頭すべし。」との達示が、法巖寺は勿論、他の同派の寺々へ来た。曹洞宗の重立つた人々は、悉く法巖寺に集つて、其の善後策を講ずるのだつた。

「どうも困つた事が出来たものぢや。桃水和尚も桃水和尚ぢや。元來大阪城下は槍長刀を帯びる者の町宿すれば、其處の役人に斷はらねばならぬ事になつてゐるにも拘はらず、それを打ち棄て、置いて、數日滞在させては、公儀へ知れてお咎めを蒙むることは知れ切つた事、曹洞一派残らず出頭せよなどは、前代未聞の大變ぢ

や哩。」と、長老はブツ／＼言つた。

「一體桃水さん、あのお武家さんが此の寺へ来て、何日位になりますね。」「左様、實は拙僧の知人で、熊本の歴々の方ぢや。決して胡散臭い人ではないが、此の寺へ訪ねて來られてから、かれ是れ一と月あまりにもなりませんかな。」と、桃水和尚は澄ましたものだ。集つた人々は桃水の平氣な態度に呆れ返つた。

「兎に角、明日奉行所へ出たら、桃水さんはそんな事實を言はないで、萬事は拙僧どもに任して置いて貰ひたい。貴僧は何事を聞かれても、唯だ黙つて低頭してゐらつしやれ。」と長老は言つた。そして明日の事を議して別れた。

翌日大阪の曹洞宗の重立つた僧侶は、悉く町奉行所へ出頭した。奉行の吟味は甚だ峻烈であつた。

「此頃聞けば、其の方ども、槍長刀を所持する武士を上下二十餘人、法巖寺に隠し置く由、一體何時頃より滞在致して居るか、委細明白に、有體に申し立てよ。法巖寺……。」と、桃水の方を睨みつけた。

桃水は黙つて返事をしなかつた。そして代表者の長老は桃水の代りに答へた。

「恐れ乍ら申上げます。私ども見聞致しました處によりますと、まだほんの兩日此のかたで、茲に居並ぶ各寺のものも、左様に思つて居られるのでござりまする。」と、うまく此の場を言ひ脱れるために、長老は一生懸命に辯じた。それを助けるために、他の僧侶たちも、口を揃へて同意の旨を述べ立てた。

「否やく、既に先月の末にも法巖寺に於て見たといふ者があるが、確かに其の方共の申す通り二三日であるか、公儀に對して嘘偽すりを申す様な不埒があつては、

例へ出家沙門たりとも、決して容赦は致さぬぞ。どうぢや、確とそれに間違ひないか。」と、奉行は詰問した。

「先刻より申し上げました處に、聊かも相違ひりませぬ。」と長老が言ふと、今迄黙つてゐた桃水は、此の時フイと頭を上げて、

「一寸申上げます。實は昨日内々相談を致しまして、先刻から長老が申述べました様な嘘を申上げたのでございます。實の處を申上ぐれば、あの武士は熊本の浪人で、手前共の寺に訪ねて來られたのは、先月の中旬頃で、もうかれこれ三十四五日にもなりません……。」と、赤裸々に告白した。役人は可笑しかつたが、笑ふては威嚴にかかはると、じつと堪へて、

「左様か、過ぎた事は致し方がない。赦して遣はず故、以後は斯かる落度のなき様

致せ、法嚴寺を初め、一同許し遣はず、立てッ……。」

長老をはじめ一同はヤレ／＼と胸を撫で下した。そして歸り途中、

「桃水どのが、折角拙僧どもがうまく嘘を本統にしようとしてゐるところに、あんな事を言はれた時は、どうなる事かとハツとしました哩。」と桃水に向いて言つた。

桃水は此の時、

「だがよくお聞きなさい。正直に言はねば、出家沙門たりとも容赦はせぬと言はれたのが怖ろしかったので、正直に言ふたからこそ、何事もなく濟みましたのぢや。」と、寧ろ手柄のやうに言つてのけた。

#### 六 禪林寺の出奔

桃水の弟子に雲歩といふものがあつたが、其の弟子の慧定といふものが、桃水に

隨身してゐた事があつた。それは雲歩に少し考へがあつて、己れの弟子を師の桃水の許に預けたのだつた。處が桃水は、此の慧定にこれといふ指導を與へなかつた。慧定は桃水の生活の凡てが、大なる指導者であるといふことを知り得なかつた。桃水は毎日慧定を伴れて托鉢に出た。それを半年ほどつづけてゐたが、慧定はもう堪へられなくなつて、或る時桃水に寓を乞ふた。すると桃水は彼に次ぎの様な絶句を示した。

慧定分明領三直休。

休休休處何亦休。

喫茶喫飯不三他免。

慧定分明萬事休。

桃水が托鉢をするのは、決して自己のためではなかつた。斯うして貰ひ得た米で飯を焚いて、それを澤山の握飯にして、貧乏人や乞食の群などのところへ持つて行

つて分配するのが常だつた。他から錢を與へられると、餅や菓子をやうなものを買つて来て、それを矢張り乞食共に與へる。それがために貧乏人や乞食たちは、桃水和尚の姿を見ると、まるでもう救世軍のやうに伏し拜んだ。此の奇篤な奇行が人々に知れると、彼が托鉢に来ると、擧つて過分の喜捨をするのだつた。

桃水は四十四歳の時、久し振りに郷里の柳川に歸郷した。そして僅かの間滞在した後、島原の禪林寺に赴いた。それは時の城主高力左近太夫の招請によつてであつた。此の寺にあつて五年間を過した。

或る冬もう押し迫つた頃であつた。桃水は一日盛んな江湖會を營んだ。それは結冬安居と稱して、夏冬の二期に修業する法會であつて、夏期のものを雨安居と言ひ、冬期のものを冬安居と言つた。此の法會は夏でも冬でも、九旬の間閉ぢこもつて修

業するものであつたが、此の法會こそ、桃水が禪林寺を離れる聖別式ともなつたのである。

翌春、即ち舊曆正月十六日に、無事此の法會を終つたが、集つた僧侶が思ひくゝに別れて了ふ事を「送行」と言つた。一同の僧侶は送行の告暇を爲すべく、桃水の室に行つて見ると、それは桃水の姿が失踪して見えなかつた。勿論袈裟もなければ手伏も見えず、一枚の白紙に墨黒々と、

今日解制大泉送行。老僧先出東西經情。

と云ふ桃水の白筆が、方丈門に貼つてあるのだつた。

此の事を聞いた城主は大いに驚いて、早速渡場の處に出舟を止めさせて見たが、誰れ一人桃水和尚を見たといふものがなかつた。傳贊に「是れ師の塵埃に混ざる始

めなり。その時は柳川に兩親の墓參して、直に中國路より舟にて大阪に着せられしといふ」と。かうして彼が一切を放擲して、禪林寺から姿を隠したのは、あたかも四十九歳の時だつた。これからが彼れの乞食生活は始まつたのだが、其の幼い時には佛を抱いた彼が、令度は人間を抱いたのだつた

### 七 師弟の邂逅

桃水には是看、琛州、智傳の三人の弟子があつた。此のうち是看は早く物故したらしい。桃水が禪林寺を抜け出すまでは、琛州と智傳の兩人が侍して居つた。處が師匠が何事も告げず、突然失踪したので、兩人は喪神せん許りに驚いた。

「師匠は必度都に上られたに違ひない。」と、兩人は直ちに京都にのほり、手分けをして師匠の在所を探ねた。

夏も過ぎて、秋も早や半の頃だつた。琛州は東山から、清水寺下の附近を探して歩いたが、師匠の桃水和尚は乞食の群に交つて居るといふことを聞いた。仍でなるべく乞食共が集つてゐる處、集つてゐる處と探ねて歩いたが、恰かも清水寺下の安井門跡のところ迄來ると、乞食の一團が眼についた。琛州は急いで其處へ來て見ると、其の姿こそ變つて居れ、たしかに師匠の姿を見出して、彼は動悸を打たせながら、

「あつ…。」と叫んだ。去年此のかた艱難辛苦、探ねもとめた甲斐こそあつたと打ち悦ひながらも、若しや人違ひではないかと、よくよく見れば、桃水は白髪を蓬々と亂して、襤褸は僅かに肩にかゝり、背に薦を負ひ、右の手には缺け椀を持ち、左の手には汚ない袋を携へ、多勢の乞食たちと、いかにも愉快氣に談笑して居つた。

「間違ひない。お師匠様だ。」と、ツカ／＼と進み寄つて、失庭に桃水の足下に轉けるやうに跪れ伏したが、同時に男泣きに泣き出した。

「お師匠様 おなつかしう△います。」と、言はうとしたが聲が出なかつた。

桃水は愕いた風もなく、琛州の姿を冷やかに見やりながら、

「小僧 用もないのに何故尋ねて來た。歸れ、早く歸れ、今生にては決して面談はならぬぞよ。」と言ひ棄て、つと起ちあがるや、東山の方を指して、スタ／＼と歩いて行つた。

琛州は桃水の姿を逐ふた。

「お師匠様！ お師匠様！ 私は例へ一命を畢るとも、お師匠様を離れませぬ。離れて何處へも參りませぬ。どうぞお伴をお許し下さい。」

「やかましい哩。」ではござりませうが、お師匠様の御一生をお見届け申し上げた上は如何様にも生涯を決めますが、それまでは何卒随伴をお許し下さいませ。」

琛州は泣き乍ら嘆願した。けれども桃水は、

「無用！ 無用！」と言ひ棄て、振り向きもせずサツサと歩いた。

琛州は尙ほも嘆願しながら跟いて行つた。彼は斯うなれば、例へ斃れるまでも、師匠の随伴をしようと思つたのだつた。やがては琛州の嘆願の聲も聞えなくなつた。桃水も何も言はなかつた。二人の無言の歩みは一里ほども續いた。さうして、とある山路にさしかゝつた時、はじめて後を振り向いた桃水は、

「小僧 無用ぢやから歸れといふに肯かぬか。拙僧と汝とは境界が違ふのぢやから随伴はならぬ。例へ随伴しても、ものゝ十日と續かぬ。手前から身を退くことは見

え透いて居るわ、歸れ、歸れ。」と言つて、またスタ／＼と歩き出した。

琛州は此處だと思つたので、大聲で喚いた。

「お師匠様。先き程から度々申上げる通り、こゝで一命を畢るとも、決してお別れは致しませぬ。どうしても離れませぬ。」「ほう、左様か、それならば手前の心次第ぢや。ぢや十日も随伴はならせらるまい。その時こそ思ひ召されば。さらば手前の持つてゐる袈裟袋から其の他のものをも一切残らず此方へ寄越さしよ。」と、言葉さへも柔らけて、琛州の身の廻りのものを取り上げてしまつた。桃水は取り上げた道具を、路傍の乞食の小屋へ投げ込んで、琛州には薦を背負はせた。

「俺は是れから江州の方へ一寸用事があるから、火の暮れぬうちに急いで行かねばならぬ。さあ、急げ！」と言つて、ドシ／＼歩き出した。琛州も後れてはと、これ

また足早やに随つたが、坂本のあたりで日はとつぷりと暮れてしまつた。二人は近くの森の中へ、背負ふてゐた薦を敷いて、一夜を露宿した。

傳贊には、

「終夜前後の物語りは一言もなく、獨り吟じ給ふ聲あると、琛州ひそかに聞くに左の偈なり。

如し是生陸如し是寬弊破碗也閑閑。

飢餐渴飲只吾識世上是非總不干。

と記されてある。

### 八 乞食の雑炊

森の中に一夜を明した二人は、翌朝坂本の町家を物乞ひしながら、堅田の方へと

行つた。と、道の傍らに、老ひほけた乞食の死骸が轉がつて居つた。桃水はこれを見たと、

「可哀相に、仲間が死んでゐる。琛州、手前は向ふの村の小舎まで行つて来て呉れ。そして鉄を一挺借りて来るのぢや。若し何の用にするのだと聞いたら、仲間の乞食が路傍に行き倒れて死んだから、それを埋めるのだと謂ひ。」「畏まりました。」と、琛州は駆けて行つたが、やがて鉄を借りて来た。桃水は自ら穴を掘つて、其の乞食の死骸を埋めてやつた。見てゐた琛州は、

「可哀さうに、人間は死んで了つたら詰らないものだ。何處の者だか知らないが……。」と、不憫さのあまり、遂ひがう咬いた。それを聞きつけた桃水は、

「琛州、お前は此の死人ばかりがなぜ可哀相だといふのぢや。上は恐れ多くも天子

將軍から、下は此の死人に至るまで、生れる時は糸一筋も米一粒だつて持つては來なかつたではないか。して見れば死ぬ時も何にも持たずに死ぬのが當り前ではないか。例へば百萬石の米を蓄へてゐても、時節が來れば割の粥が喉を通らず、倉に充つる千金の衣裳があつても、終ひは經帷子が一枚ではないか、茲に氣のつかぬものは如何に自分のあるものでも、實に愚かの至りぢや哩。」と言つて、見ると今まで死骸が轉がつてゐた傍らに、雑炊の入つた一椀があつたが、それは犬の喰ふものにも劣つて、見ただけでも嘔吐を催すほどであつた。桃水はそれを取り上げると、さもうまさうに半分ほど喰つた。そして残つたのを、

「今朝から何にも喰はぬので、さぞ腹が減つたであらう。これを喰ふがよい。」と言つて差し出した。琛州はちよつと躊躇したが、思ひ切つて一口にグツと呑み込んだ。



とても嘔むと云ふ様な事は出来なかつた。そんな事をして居たらば、嘔き出してはねでならぬほどの悪臭があつたので、彼は眼を瞑つて一息に呑んだのだつた。其の様子を早くも見てとつた桃水は、

「厭が、厭なら此方へ返せ！」と言つて、琛州の手から腕を引つたくる様に取つて、まだ残つて居た雑炊を、まるで貧り喰ふ様に、少しも剩さず喰つて了つた。すると琛州の顔色は蒼くなつて、今しがた呑んだ雑炊を、ゲツと嘔いて了つた。

「琛州、手前はそれぢやから随伴はならぬと初めから固く言ふたのぢや。剛情にも俺の言葉を用ひぬから、斯ういふ不始末を出来すのぢや。さア歸れ、昨日の小舎に手前の袈裟袋を預けて置いた。十日ばかりのうちには、小僧を取りに寄越すからと言つて置いた。それを受取つて戻れ、そして智傳を探して二人一緒に、佛國寺

の高泉和尚の許に行つて桃水の指圖で参りましたと言つて、確かり修行をせい。其處でこそ一命を終るとも、いふほどの辛抱をして、二の足を踏み外さぬやう勤めなぐちやならぬぞ。此方の事はこれ限り夢にも思ふて呉れるな。それが何より此方へ對する兩人共の孝順といふものぢやぞ！」と言ひ棄て、桃水は江州の湖の方へとユタ／＼行つて終つた。琛州は師匠の姿が見えなくなつても、やゝしばし合掌して拜んで居つた。

後此の琛州は桃庵を開基し、寶永三丙戌正月二十八日示寂し、智傳は正宗庵を開基し、寶永六年己丑五月二十四日に示寂し、共に佛國寺に卵塔がある。

### 九 佛像と狂歌

桃水は琛州を還して、一人滋賀方面から名古屋、奈良、伊勢あたりを徘徊した。

伊勢では内宮外宮の乞食の群に交つてゐた。奈良では大佛殿の掃除男となつてゐた。後に草津に来て奉公もした。駕舁きもやつた。粟田口では馬子の群に交つてゐた。けれども同じ處に一年と同じ事をしてゐたことがなかつた。折々處を替へ、姿を變へるのだつた。曾て滋賀の天津に居た時には、桃水は馬の革鞋を作つて賣つてゐた。其の吝は「天津の翁が吝」と言つて大評判になつた。馬子たちは争ふて此の「翁が吝」を購めた。其の頃の桃水の住居と云ふのは、或る商家の土藏の庇に二間位の空地があつたのを借りて、泥と木の枝とで貧しい小舎を造つた。そして其處に起居してゐたが、何も炊事道具とはなく、毎日餅のやうなものを喰つて、二年あまりを過した。

或る時、馬子や駕舁どもが桃水のこの貧しい小舎にやつて來た。

「おい、爺や、お前の處にや佛壇がねえ様だが、佛壇が無えと切支丹婆天連と間違へられるぞ、なぜお前の處ぢや佛様をまつらねえんだ。」と訊いた。すると桃水は笑ひながら答へた。「は、ムムム、飯を炊かぬ處は、佛も厭がるから喃……。馬子や駕舁どもは、此の奇答にドツと哄つた。すると其の翌日、一人の馬子が天津繪の阿彌陀畫像を一枚桃水の許へ持つて來て、

「おい爺や、これをやるから持佛にして置くが可いや。」と言つて、桃水の前へ出した。

「わしには佛は無用ぢや。」と云つて桃水は斷はつた。けれども馬子は無理にそれを置いて行つた。桃水も仕方がないから受取るだけ受取つて置いたが、或日外出中に、隣家の人が小舎に來て見ると、壁に阿彌陀の繪像をかけてあつた。そして其の傍ら

に、消炭で、

狭けれど宿を貸すぞや阿彌陀どの

後生たのむとおほしめすなよ

と云ふ狂歌が書いてあつた。

また其の頃、或る人が、何故斯ういふ生活を営むのかと訊いた事があつた。すると彼は、次ぎの様に答へた。

「今どきの僧は、身を棄つべきことを教ゆれども、その實を知らず、拙は其の實を試むるのみ。」と。

彼が往く處は殿堂であり、彼が汗する處は敬虔なる勤行であつた。一般の人々は彼にとつては佛菩薩の顯現だつた。彼は生ける此の佛菩薩に身を以て奉仕した。彼

は身を以て經典を讀んだ、稀有の聖者だつたのである。

### 一〇 桃水と知法尼

大愚良寛和尚には、貞心尼といふつましやかな女性が傳つた。聖フランシスには、艶麗花の如き姉妹僧クラフが待つて居つた。それと同様に、乞食桃水にも知法尼といふ敬虔なる女性が、純真なる崇敬愛慕のまことを、彼に向つて捧けて居つた。

桃水が島原の禪林寺を脱け出してからは、毎日知法尼は心淋しと、師匠の身の上を案じながら暮して居た。何とかして師の所在を知らうといふ爲には、彼女は神佛に祈願をこめた。或る時の御隠に、「汝の尋ね人は京にあり」とあつた。彼女はそれを信じた。そして伊勢參宮に事よせて郷里を出て、はるばると京に志した。師に

逢つた時の土産とて、莫大な金と、新調の夜具とを準備して行つた。先づ伊勢の神宮へ参詣して、首尾よく師に逢ふ事が叶ふやうにと、熱心に祈願をこめて、京へ来ては豫ての知己、由緒ある家に宿をとつて、其家の主人に上洛の理由を打ち明けて助力を乞ふた。主人も知法尼の熱心なのに感動して、及ぶだけの助力をしようと言つて勵まして呉れた。さうして、主人は毎日師匠を探すために出てあるく知法尼のために、下男と下女を道案内につけてくれた、彼女が京に来てから二十日あまりは過ぎた。

或る日の事であつた。それはもう正午にも近い頃、例も様の二人を連れて、知法尼が來がかつたのは五條の橋であつた。見ると其の下の河原には、大勢の乞食どもが集つて居つた。知法尼はふと考へついたのは、若しやあの乞食共に聞いて見た

ならば、判るかも知れないと云ふ事だつた。それで其の乞食の群の傍へ行つて色々尋ねて見ると、

「あゝ、きつと、あの俺たちの仲間の情深い坊さんに違いねえ。あの人なら、もう來る頃だ。俺つちが腸を空かしてらうと言つて、食べ物なり錢なり持つて來て呉れる頃だし、それに近頃は仲間のうちに病人があるんだから、きつと見舞ひに來て來さるから……、あつ、噂をすりや影だ。お入來になつたく。」と言ふ聲に、知法尼が乞食が指した方を見ると、白髪は蓬々と生へ、髯も伸び放題、背には薦を背負ひ、手にば何やら紙包みを携へ、杖を曳きながら來たが、其處に臥せつて居つた癩病乞食の傍へ近づいて行つた。其の姿こそ變れ、それはたしかに師匠の桃水和尚であつた。彼女は轟く胸を押し鎮めて、どうするかと見て居ると、紙包みの中から

何やら食物を取り出して、其の癩病を食に與へ、流るゝ濃汁を拭いてやるやら、其の看振りの叮嚀なのに、見てゐた知法尼は知らずく涙がながれた。彼女は堪らなくなつたので、轉ぶやうにして、桃水の側に出てひれ伏した。

「御老師様、お久しうござります。」と言ふなり、ワツと泣き伏した。桃水は驚いたといふ風もせず、ちらり知法尼の顔を見て、また癩病を食の方へ眼をやつた。

「御老師様、お見それ遊ばすこともようござりますまい。妾でござります、島原の尼、知法でござります。」と言つた時、桃水はまたちらと眼を呉れて、

「用もないに、何しに探ねて参つた。」伊勢参宮の折、御所在を聞きつけ、これ迄参りましたに、嬉しくも御尊顔を拜しまして、本望でござりまする。「知法や、よく聞きなさい。女人が罪が重いと云ふのは、愛慕の心を主とするからぢや。世の常

のものならば兎も角も、何の愛情も素氣もない此方へ、對面したとて、それが何の益にならう。其女が三寶因果を信じて剃髪の志を失はないで居て呉れれば、此方へ常に對面してゐるのと同じことぢや。歸れ、歸れ。」と、聊かだに情の籠らぬ返事であつた。彼女は少しもひるまなかつた。

「御老師様、尼が一生の願ひでござりまする。どうぞ不憫と思召して、お聴き届け下さいませ。」何ぢや、其の願ひと云ふのは。「今日よりどうぞ東山の邊りに小庵を求め遊ばし、それにお住み下され度ふ存じます。御生涯の齋米は、尼が何とか才覺致して差し上げ度ふ存じます。就きましては、夜具も新調致して参りました。また庵をお求め遊ばすための料も準備へて参りました。知法が一生の願ひでござります、どうぞさう遊ばして下さいませ。」彼女は涙と共に、己が希みを訴へ

た。

「とはまた此方の料簡を少しも知らぬ愚かな所存ぢや。其女の申す庵が欲しければ、何も其女の指圖を受けずとも、今言ふて今でも出来るのぢや。それが厭さに斯の態にて、今まで此方ば遊んで来たのぢや。知法や、其女の願ひは叶はぬぞ？」

師匠は自分の希みを告げたならば、必ずや欣んで呉れるものだと思つてゐたところか、案に相違の上の訓戒に、今更ら乍ら自分の無智とはしたくない考へとを耻ぢ入つた。けれども其の儘郷に歸るといふことは、到底彼の女としては忍びない事であつた。それでせめては準備して来た金と夜具だけでも納めて下さいと再三言葉を盡して頼み、それ等のものを宿から取り寄せた。桃水はその立派な夜具と、澤山の金子とを眺めて、ほゝゑみながら優しく言つた。

「其女の心、お捨てになるとも、河へ流しになりともと言ふ、其の心底が布施の最上ぢや。よし、よし。其の夜具を此方へ呉れ！」

桃水は知法尼から夜具を受取ると、直ぐにそれを傍らの癩病の乞食に向つて言つた。

「おい兄弟、仕合せが舞ひ來んで来たな。其の薦をとつて、此の夜具を敷け、その破れた衣物を捨て、此の新らしい衣物を着るが可い。」

知法尼は、師匠の此の慈悲深い行爲を伏して拜んだ。癩病の乞食は夢に夢見る心地で、桃水和尙が言ふ通りにした。桃水は知法尼に貰つた大枚の金子を、直ぐに小判に兩替して、大勢の乞食に頒けてやつて、知法尼に向つて言つた。

「知法や、其女は善い布施をなされた。未來の福田これに越すことはない。さて、

少しの朋輩が東山の方に病氣で憊んでゐるから、是から訪ねて行かにならね、少しばかり小錢を呉れ。」と、桃水はまた知法尼から小錢を貰ふと、それを袖にガチャつかせながら、

「ではそれで別れますぞ！」の、言葉を残して走るやうに去つたが、それきり桃水は其の樹の下に姿を現はさなかつた。

### 一一 桃水酔屋を開業

其の後も桃水和尙は乞食生活を續けてゐたが、其の頃京都の角倉某と云ふ味噌醤油を造る豪家があつた。此家の主人は黄蘗宗の高泉禪師に深く歸依してゐたが、禪師から桃水和尙の事を屢々聞いて、何とかして桃水和尙を自分の家に招きたいと思つてゐた。仍である時乞食の群に桃水を見出したので無理に家に招じて、厚く款

待しながら、

「桃水さま、坐禪の中心は如何したら宜しうございませう？」と訊いた。桃水は天井を仰ぎながら、さも無關心のやうに答へた。「坐禪の用心と言つては別れない。醤油は土用のうちに造つて甘し、味噌は寒に造つて善し。」と言つた儘、他に一言も發しなかつた。主人は非常に感動した。ところが此の角倉家の一家のうちに、黒谷の浄土宗の和尙に歸依して、所作を繼とて、一日に幾萬遍を充たさねばならぬと茶話しながらも、稱名念佛する人があつた。この人が桃水に向ひて、さも誇らし氣に述べた。

「和尙さま、私は一日のうちに、一萬以上の急佛を稱へます。何か一つ和尙様の御教化を願ひたふ存じます。」聞いてゐた桃水は、「あゝ左様か、それは奇特な御信心ぢ

や。どれ一つ書いて進ぜう。無雑作にさう言つた桃水は、傍の硯箱から筆をとると。

急佛を強ひて申すも要らぬもの

もし極樂を通り過ぎては

と、一種の狂歌をさら／＼と書いて渡した。

角倉の主人は、益々感じ入つて、すっかり歸依して了つた。

或る時であつた。主人は桃水に會つた。其の日は珍らしくも桃水の方から飄然と訪ねて來たのだつた。主人は喜んで、

「御老師様には、ようこそ御越し下されました。實は御老師様に、少々お願ひがございませうが。」「ほう、その願ひと言はれるのは。」「外でも△りませぬが、昔から御

出家様は、人の供養施物にて一生を過ごさるゝ慣ひ、御老師様はとも角それを厭やがられます。御心底の程は私どものなか／＼知る筈がございませぬ。それで強ひて供養の施主に成りたいと思つては居りませぬが、どこ迄も施物を厭がられるならば、如何でございませう、少しも信施にならぬもので、一生をお暮し遊ばすやうになさ

いましては？」「はてな、信施にならぬ方法で暮らすと云ふと……そんな事が出来るか喃。」「御不審は御尤もでござりますが、俗人には算用と申すものがございませう。

私が家業上大勢の人達を養ひますのも、算用の善き故に、身代も減ることなく、先祖代々相續して今日に至りました。私はこれ迄幾十年の間、此の算用を用ひて來ましたから、暮し方の算用術には妙を得て居ります。御老師様も、一つ此の算用をお用ひになつては如何でございませう。」「なるほど、面白い事を聞いた。それで、ど



うしたら信施にならぬ方法で暮らせるかな。」「左様でございます。御承知の通り私どもの家では、上下大勢のものが居りますから、晩の炊事もなかく、大抵ではございません。人数相應にちゃんと調へるといふ事は甚だ難かしい事で、足りなくても困りますが、と云ふて餘つても厄介でございます。けれどもまあ足らぬよりも幾分か餘つた方が安心でございますから、毎日餘る様に致します。そして餘つたものは貧乏人に與りますが、それでもなほ餘る事がありますから、それは鼠や猫や犬などに呉れてやります。けれどもそれでも餘る事があると、棄てて了ひます。それで私が考へますには、此の棄てる残飯で酢を造つたならば、一年のうちには随分出來ます。仍でその酢を賣つて、其の金で米を求め、さうしてお暮しになつたら、これは信施でお暮らしになるのではなからうと存じます。なぜかと申しますと、これは私

か路傍に棄てるものでございますから、決して清淨とは申されません。若し御老師様御合點でございましたら、幸ひ北山の鷹峰に、私の下男で酢屋の茂助と申すものが居りますが、其の隣りの家が幸ひ私どもの所持でございますから、それにお住ひ下され、老僕一人を相手に酢を作つて賣らせ、御自分は氣儘にお暮らしあそばせば、信施は一向無いかと心得ます。其の老僕と申すのは、私どもに居りますが一生涯私が面倒を見てやる事に決つて居りますから、此の者を御使ひ下され。角倉は熱心に説き勧めた。桃水も其の熱心に感じ、其の鋭くところの信施論を甚だ面白いと思つた。

「なるほど、お前の言はつしやる事はなかく、面白い。實は俺も見らるゝ通り段々老境に入つて、此の頃では歩行もなかく、以前のやうではない。一つお前の勧めに

したがつて、居を定めて見よう。」と言つた。

斯ういふ事で、桃水は京都から一里足らずの北山の高峰で、老僕を相手に酢をつて賣りながら、貧しくともいと平和な晩年を送つた。酢屋を始めてからの桃水は、酢屋の通念或は道全と稱して居つた。

一二 桃水の還化

一代の奇僧桃水は、七十八歳の高齡で、あだかも樹木が枯れるやうに、極めて平和に還化した。それは天和三年九月十八日の事であつた。坐脱したときの遺偶に曰く、

七十餘年快哉屎。 臭骨頭堪作何用。

凄眞歸處作膺生。 鷹蜂月日風即清。

と、また傳賢に、「老僕急ぎ之を角倉に告ぐ、即時に使用して、智傳、琛州とともに佛國寺より來つて遺骸を迎へ、高泉和尚の焼香にて葬送す。その無縫塔いま佛國寺の境内に在り、銘に「雲溪水老宿之塔」と書す。」とある。

## 吉益東洞

## 一 萬病一毒を提唱

東洞は望月三英と共に、天下二名醫と稱へられた男である。彼は元畠山氏、室町管領の裔であつたが、曾祖父政慶紀州に居て、豊臣氏に滅ぼされて、子孫は一族の吉益半笑齋に倚つた。吉益氏は代々淺野侯の藩醫で、金瘡産科の技に長じて居つた。

此の吉益氏に身を倚せた政慶は、吉益の姓を冒して醫に隠れた。後淺野侯封を安藝に移すや、畠山氏の一族も従ひ往き、政慶の子道安、名は政光亦廣島に遷り、始めて本姓に復して醫を業とした。道安の子重宗こそ、實に東洞の父であつたのだ。

東洞名は爲則、字は公言、周介と稱した。(介は一に輔に作り、或は要助と稱す) 東洞は幼時既に大志を抱いた。

「我が先世は天下の顯宗なり。我れこそ家を復興せん。」と、早くも志を建て、家業として居る醫を修める事を厭ひ、専ら兵法を學び、劍馬の道を修めた。

斯くして長ずるに随つて、彼は此の大望を抛たねばならなかつた。餘儀なくせられたのではなく、彼自ら之れを抛つた。打ち續く徳川の天下には、到底齒が立つべくもなかつた。

「良柏となることが出来なければ、良醫とならう。國の療治が出来ぬなら、切めて人の療治で我慢する外はない。」

彼は涙を呑んで劍を棄てた。たとへ劍を見切つて醫者になつても、彼の志は國

家の病を治するにあつたので、泰平百年の徳川氏の盛時に生れ合せた事を、如何ばかり無念に思つたであらう。不幸だと口惜しかつたであらう。

彼は仕方無しに、先づ順序として家の業たる金瘡産科の術を修めたが、

「胎産は婦人の常ぢや、金瘡はこれまだ多寡が外傷ぢや。何れも病氣といふ程のものでは無い。苟くも醫者として立つ以上は、到底俺の術を施すには足らぬ。」と言つて、遍ねく醫書に目を通し、長をとり短を棄て、苦心研究の結果は、法を扁鵲に則り、方を仲景に稽へ、「萬病一毒」といふ事を唱へ出した。

「萬病一毒、藥も亦毒ぢや、毒を以て毒を攻める、體内の毒が去つて健になるのぢや。元の毒を損はず、何を以て誦ふと云ふぞ。」といふのか、彼が唱ふる萬病一毒主義の根義であつた。

當時の醫道は、全く衰頹の絶頂に達して居つた。唐宋の諸方や、漢晋の古方などを究めるものもなく、療治とし云へば、溫補の一點張りで、其の病原を辨へず、只だ一時的の姑息な手當を施すのみであつた。それで氣慨ある彼は、

「天下の醫者をして醫するに非ざれば、疾を救ふ能はず。」と口癖の様に言つて、常に憤慨して居つた。彼は其の天下の醫者を醫すべく、父母を奉じて京都に出て來たのは、彼が三十七歳の時だつた。

## 二 脈を診る手で泥捏ね

京に出た東洞は、事毎に感愴無量に堪へなかつた。それは、京は彼の祖先が榮えた土地だつたからである。

「我不肖にして家を興し得ず、不本意乍らも醫に隠れ居る以上は、祖先に對しても

島山の本性を冒す事は面目ない。

斯く叫んだ彼は、再び吉益の性を名乗つた。彼が京に出てから足かけ四年、其の間非風の術を有しながら、名門雲の加き都でありながら、無名の田舎醫者として、彼の腕を揮ふの機會はなかつた。

彼は毎日土偶を拵らへて、纔かに糊口の資に充てて居たが、泥だらけになつて、十日働らいても其の得る所の料は僅かなもの、とても兩親を養ふ料には足りなかつた。赤貧洗ふが如き中に、自分は空腹を忍ぶことが出来ても、扱て父母には夕に何を與ふべきかと、途方に暮るる事は度々であつた。

或る日の事であつた。其の日も夕の飯の料を何うしたものかと、暮れ近い空を眺めながら思案に暮れて居る所へ、一人の病者が診察をして貰ひたいと申し込んで來

た。これ彼が京に出て始めての患者であつた。素より歩いて來た位であるから、さしたる事もなかつたが、彼は懇ろに診察して、丁寧に手當を施し、藥を盛つて、様々の注意などを與へて歸らしめた。

やがて東洞の立關に訪れたものがあつた。東洞が出て見ると、それは一見したばかりでも同業の醫者だといふ事が知れた。

「吉益先生は御在宅でござりまするか。」「手前が吉益東洞でござるが、其許は。」「ではあなたは先生で△りましたか。否や存せぬ事とて失禮いたしました。初めて御意を得ます。手前は山脇東洋と申して、同じく斯道の末に連る者で△るか、先生の御高説を承はり、教へを乞い度いと存じ、お訪ぬ致した様な次第でござりまする。」「扱ては山脇先生でござつたか。これは、一向存じませず、失禮致しまし

た。穢るじい處でござるが、さアどうぞ……。」

彼は慇懃に招じ入れた。山脇東洋と云へば、當時京で其の名を知られた名醫であつた。東洋の話によると、珍らしくも先刻東洞の許に診察を乞ひに來たのは、東洋の處へ來たのを、未だ東洞の眞價を知らないので、試しの爲めに寄越して見たのだつたといふ。

「先生を試したと申しては甚だ失禮でござるが、後學の爲に先生の處方を承はつて、實は驚き入つた次第で△ります。到底我等風情の及ぶ處ではござりませぬ。以後御別懇に願ひ、御指導を賜はらば、此上の悦びは△りませぬ。」「これはまた、拙ない所がお目にとまつて、其のお言葉では却つて赤面致しまする。御懇親は手前よりお願い申す處、何卒今後は何彼と御教示にあづかりたい存じます。」

意氣投合した兩人は、初對面にも拘はらず、恰かも百午の知己かの様であつた。東洋は我國に於ける解剖學の鼻祖であつたが、以來は兩人屢々相往來して互ひに論を闘はし、或は實地について研究し、以て共に術を磨いた。

### 三 お情食祿は頂戴せぬ

卓拔の術を有つて居た東洞も、時節到來せず、土偶を拵らへては、夕の飯の工面にも頭腦をなやましてゐたが、東洋と相知り、其の推奨によつて、彼の名は漸く洛中に聞え、篤學の書生も、争ふて彼の門に集る様になつた。又諸侯は、禮を厚うして彼を請招した。後彼の術が天下に喧傳するゝに及んで、彼の後に古方を唱ふるものは、其の門に學んだものと舌とを論せず、彼を以て其の宗とした。會て佐倉に在つた舊友が、主用を帯びて京に上つた事があつた。當時彼はまだ土

偶を作つて、赤貧は洗ふが如き窮苦にある時だつた。舊友は非常に同情して、藩の上主公に推舉すると、早速台し抱へ取らすと云ふ事だつたので、舊友は吾が事の如く善んで、其の旨を東洞に達した。東洞は舊友の親切を泣いて感謝した。けれども彼は斷然謝絶して抱へられなかつた。彼の峭直の性情は、其の時の返答によく現はれてゐる。

「餓死の爲に志を下して、お情食祿を頂戴致しては、祖先に對して申譯ごさらぬ。御懇情は忝けないが、仕官の儀は御斷はり申す。」と言ふのだつた。

彼の名は、當時幕府に仕へて天下の名醫と稱されて居た望月三英と並び稱さるゝに至つた。

或る時彼は南部侯の請招に應じて、遙々と下つての歸途、江戸を過ぎると聞いて、

老中堀田相模守は、又ない機會ぢや、天下の名醫二人を對論せしめようと目論んだ。

三英は常に東洞をそれとなく貶して居たので、堀田侯からの使者が立つと、

「それは面白い、承知仕つた。」と答へた。

同時に、東洞の室所へも使者を立てられた。其の使者と云ふのは、東洞と舊交のある者で、平素東洞を崇拜して居たので、彼の三英の鼻を折つてやらうと考へ、實は此の者から堀田侯に討論の事を勧めたのだつた。

「吉益氏、お喜びなされ。愈々尊公が日本一の名譽を得られる時が來ました。」「多寡が市井の一草醫、日本一などは夢にも見れませぬ。また夢にも見ようとは思つて居りませぬ。」

東洞最負の使は、君公の旨を東洞に傳へた。

「それは折角の思召でござるが、平に御断はりを致しませう。」  
使者は意外だつた。

「なぜお断はりになります。何、尊公ならば屹度あの三英をやり込めるだけの優れた力を有つてお在でる。」「いや、貴公の御親切は忝けないが、其の事だけはお断はり申さう。」「そりや又何故に？」「されば、三英殿は柳營の御典醫でござる。手前はと云へば、多寡が市井の一草醫に過ぎ申さぬ。假令議論に負けた處で、手前の恥ではござらぬが、若し過つて勝ちでもすると、第一將軍家へ對して御氣の毒ぢや。それもあるし、それに第一机の上の空論は、總じて何の役にも立たぬ暇潰し、固より名聞は拙者の好む處でござらぬ。」「それは尊公の卑下といふものぢや。さう云ふ事

で尊公が討論を爲さらずとも、世間ではあれ見よ東洞は、三英に敵はぬ處から討論を避けたとしか思ひませぬ。」「假令世間で然う言はれても、拙者は何等意に介しませぬ。」

これ以上薦めもならなかつた舊友の使者も、仕方なく張合ひ抜きの體で立ち歸り、其の事を復命するの外はなかつた。

ところが、一旦立ち歸つた使者は、其の日のうちに再びやつて來た。

「實はお言葉通り君公へ申上げましたところ、それは近頃残念の至りぢや。併し席上の空論が無益と申さるゝは一理がある。此の上は無益の空論でなく、共に眞の病者を受持たせて、其の治療の如何によつて、眞の技倆を試みようと思はれますが、此の儀ならば豈も御不承知ではゐるまい。」



今度こそはと言ふ意氣込み。

四 國士の風をそなへた東洞

東洞もそれでもといふ譯には行かなかつた。

「それ程までに不肖の術を御心にかけて下される段は忝けない。身にあまる面目、此の上御辭退申上げては却つて畏れ多い。委細承知仕りました。度々御苦勞でござつた。」と受けた。

「お受け下さるか。これで拙者も使者として選ばれた甲斐がござる。」「晴れがましい争ひは、手前好まぬ處でござるが、御懇命に従ひまして、拙なき術を御覽に供へるでござりませう。」「では、追ての御沙汰をお待ち下され。」と、使者は漸々の事で物と息を吐き、重荷をおろした氣で立ち歸つた。

東洞は數日江戸に滞在して、名所古蹟などを見物しながら、臺命の下る日を待つた。處へ京から飛脚が來た。それはまだ東洞が、青雲の志を抱ひて居た頃の舊師、長州の儒者山縣周南が、疾を獲て京にのほり、東洞の診を求めようとしたが、目下東洞は江戸に滞在して居るといふので、態々飛脚を以て、診を受けたいといふ書を齎らしたのだつた。

「生命は重い。なれども舊師の恩は更らに重い。萬一一日遅れて一日の手遅れになる様な事があつてはならぬ。」と、堀田家の懇命を固辭して、即日江戸を立つて京へ向けて早駕籠を急がした。

三英派のうちには、舊師の疾に事よせて、東洞が戦はずして逃げたと手を拍つて笑ふものもあつた。

けれども東洞は、そんな事を意に介する様な男ではなかつた。東洞は何處までも國士の風があつた。諸候に招請せられる時は、何時も藩主が自ら送迎し、施衛の後に於ける談話の如きも、動もすると政治に趨り易かつた。

東洞は浮薄を好まなかつた。其の容貌は卓絶、黄髮蝟毛の如く、威風凛々として、眼光人を射たと傳へられて居る。常に當時の儒者と醫家とを較べて、山脇東洋を伊藤仁齋になぞらへ、何事にも衆に先んじて手をそめるのを長所とし、夙に古方を唱へて一世を風靡したけれども、時々其の持論には軒輊があつた。

「我業は敢て物徂萊に譲らぬ。」と誇稱して居たが、彼も亦醫師天狗の一人たることを免かれなかつた。

「碁を圍んで、勝敗に其の意を奪はるれば、師も真境に至る事は出来ぬ。死生は醫

者の關する處でない。」といふのも、彼の持論の一つであつた。

また、曾て長男の某が瘡瘡を患つた時、彼は紫圓を與へて助からなかつた。するとまた其の妹へも感染したので、同じく紫圓を與へようとすると、妻がそれを制めて、

「先の時にも毒の攻力が違ふと譏つた人もありましたから、今度ばどうか他の藥を與つて下さい。」と頼んだ。すると彼は色をなして、

「處方は確かぢや。之で死ねば天命ぢや。俺は世のつまりらぬ取沙汰によつて、信ずる所を狂ける事は出来ぬわ。」と怒鳴りつけた。

「それからまた、彼の許に療治を求めに来るものがあると、自分の信ずると否とに拘はらず、治療の上に手加減をする様な事がなく、

「それがし醫者の藥は厭だといふ者に、口を割つて嘸のませて、同じ様に利がなければならぬ。」と揚言して、只管患者の意に迎合する事にのみつとめる様な、所謂幫間醫者の輩を諷刺するのだつた。

東洞は安永二年九月、七十二歳を以て歿した。彼の三英に後るゝこと二年であつた。

### 三井親和

#### 一 親和染の由來

三十三間堂と云へば、今人の多くは京の三十三間堂のことと早合點するが、三十三間堂は江戸にもあつた。それは元淺草新兩替町の弓師備後なる者が、諸士稽古の爲と稱して、以前仕へた天海僧正の執奏で、公儀の許しを得て淺草に堂屋敷と金若干を得、その他諸家の施財を集めて、寛永十九年霜月に建立された。本尊は千手觀音、外に八幡宮と矢崎稻荷との神體を僧正から寄進され、射初めの式は吉田流の射術家、酒井雅樂頭の家來、森刑部直義によつて行はれた。處が備後は矢代を取る事を目的として、千五百兩といふ莫大の材木代を、境屋久右衛門なるものに拂はな

かつたので、境屋久右衛門から上へ訴訟に及んだ。二年を経た正保元年十月、評定所に於て詮議の末、備後は遂に所拂ひとなり、堂屋敷共に改めて境屋久右衛門に下されたが、元禄十一年九月、貫ひ火のために炎上した。そこで寺社奉行へ願ひの上、深川八幡前へ代地を賜はつて、同十四年霜月に出来上つたのが新三十三間堂であつた。併しよほど火に縁があつたと見えて、正徳三年の師走、大火の爲に復又灰燼に歸したが、今度も先規によつて公儀からは材木、諸大名から金品の勸進を受けて、同年六月再建落成した。其の時東照権現甲冑馬上の神像を安置し、射術の外に神樂を行つて開帳をした。

ところが、その後五年を経て享保十五年、今度は八月の暴風の爲に吹き潰されたので、久しい間其の儘に打ちやつてあつたが、能瀬某なるものの發願で、二

### 十二年振り再建された。

扱て愈々普請も出来上つたので、市中の有志で扁額を寄進しようといふ事になつたが、其の文字を誰に頼んだものかと、寄り々々相談した。結果は其の頃深川に住んでゐた、三井親和に頼まうといふ事に相談が一決した。

三井親和は信州の産だと傳へられてゐるが、通稱を孫兵衛、字は孺郷、龍湖又は萬玉亭とも號した。永く江戸に住んで、書を細井廣澤に學び、また射術にも長じてゐた。廣澤は赤穂義士のうち、堀部安兵衛武庸と親しく交はつたが、彼の元禄十五年極月十四日の對ち入りの夜には、萬一事の成らなかつた時は、火を放つて吉良邸を焼き拂ふといふ申合せがあるといふ事を聞いたので、當夜は幾度も屋根にのほつて、はるかに本所の空を望み、終ひに一晩中一睡もしなかつたといふ。さういふ男